
黒き大樹の戦巫女(旧)

改樹考果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒き大樹の戦巫女（旧）

【Nコード】

N6762G

【作者名】

改樹考果

【あらすじ】

黒き大樹の戦巫女と呼ばれる女子中学生が、不幸な彼女に出会った時、退魔士と呼ばれる者達の戦いの物語の幕が上がる。

第一話『戦巫女と不幸な彼女』 1

「じゃあ、契約成立ね。これからよろしく、お姉さん……………って、そう言えば、ごたごたしてたから聞いてなかったけど……………お姉さんの名前は？」

「あたしの名前は、相島命子よ……………そう言うあなたの名前は？」
「私の名前は

ヒロイン

月明かりに照らされた夜の商店街の中を私は一人で歩いていた。耳に付けたインカム（携帯に繋がっている）から私を心配する声が聞こえるけど、無視。

あの心配症には困ったもの……………思わず口からため息が漏れた。……………それにしても、着替えぐらいはしておくべきだったかな？

私は自分の格好を見て、ちよつと苦笑した。

どこからどう見ても、『只の女子中学生』の格好。

これから、『命を掛けた仕事』をするとは、誰も思わない。

もつとも、私としては、命を掛けるほどの仕事な気がしないんだけどね……………。

不意に、獣の匂いが商店街に満たされ始める。

来た！

私は立ち止まり、左手に意識を集中し、右手を左手に添えると同時に、商店街の影と言う影に、赤く輝く二対の瞳が無数に現れた。

?????

それは追われていた。

多くの仲間を瞬時に失い。

それでも、一匹でも生き残っていれば、その勝ちだった。だから、それは逃げていた。ぼろぼろになりながらも、力尽きそうになりながらも、逃げていた。

だが、追手から逃げる際に受けた傷により、その命が逃げきる前に尽き掛け……そして、それは出会った。

『奇跡の存在』に。

相島

女の身で野宿は辛い。
そう何度思った事か……。

誰もいない公園のベンチの上で、私は溜め息を吐いて、苦笑した。これで何度目のクビだろう……覚えてないや……。

今日、住み込みで働かせて貰っていた職場から解雇を通告され……まあ、色々あったので、その日の内に社宅から叩きだされた。今の私の全財産は、大型バックに入った生活必需品と大型バイクのみ。

明日からどうしよう……ええい！くよくよしていても仕方がない。うん……よーし、明日からがんばるぞお。

深夜なので心の中で気合いを入れた時、ずちゃっと何かが近くに着地した音がした。

反射的に音のした方向に視線を向けると……そこに、赤く輝く瞳を持った黒い大きな犬……じゃない……もしかして狼！？

その黒い狼は、腹部に大きな傷を負っているみたいで、ぼたぼたと黒い血を地面に落としている。

あまりの事に、硬直していると、黒い狼は私の方に顔を向けて鼻を動かした。

そして……笑った！

狼の不気味な笑い顔に驚くより早く、不意に、黒い狼が飛び掛か

ってくる。

その狙いは……首！？

反射的に右腕で首を守り、その右腕に黒い狼の牙が食い込む。

痛い！痛い！痛い！

声すら上げられないほどの激痛で、頭の中でそんな言葉しか出てこない。

必死に身体を動かして、黒い狼の身体を叩いたりするけど、微動だにしない上に、牙がどんどん腕に深く食い込んでいくのが分かり、あたしは………死を覚悟した。

その瞬間！

不意に黒い狼が私から飛び退いた。

わけも分からず、目で黒い狼を追うと、黒い狼は唸り声を上げて、公園の入り口を見ている。

視線を公園の入り口に向けると、そこには『黒い木刀』を持った女の子がいた。

第一話『戦巫女と不幸な彼女』 2

ヒロイン

退魔士を家業とする人達がいる。

人に害なず世界の理とは違う法則『魔法』を宿したものの、もしくは、そのものを退ける事を生業とする者。

それが退魔士。

そして、私の家も退魔士の家系で、幼い頃からその為の修行をし、中学生になってからは退魔の仕事もさせられている。

退魔は、私としてはほとんど日常だからいいけど………こう、なんであの二人がいない時に仕事を回すかな………。

私はそう思いながら、全速力で走っていた。

さつき倒しそこなった一匹の『魔物』を追って。

魔物は、名の通り、『魔法が宿った物もしくは動植物』の事で、頻繁に発生しては、人を襲う。

魔法は、本来この世界にない法則だから、それをこの世界に留める為にはそれなりの『魔力』が必要になる。だから、その魔力を生成する為に、この世界の中で最も意志力を保有している人間を食べようとする。

何故なら魔力は、別名『根源意志力』と呼ばれる意志力の最小単位^{II}『在ると言う意志』で構成されているから。

だから、魔法をその身に宿す存在にとって、魔力その物に次いで、人間は美味しそうに見える………とか。

迷惑この上ない話だけど、幸いなのか不幸なのか、普通の人達はその事を知らない。

魔法そのものがこの世界とは違う法則だから、普通の人々が認識出来ないとか、世間が混乱する為に政府が秘匿しているとか、色々な理由があつてそうなってるらしいけど………それでも、時々、普通の人々が巻き込まれる。

私をやつと逃げた魔物『影狼』に追い付いた時、公園の真ん中で唸っている影狼とすぐ傍で倒れている女性がいた。

巻き込んだ！？どうして？人払いの結界ちゃんと張ったはずなのに！

私はそのあり得ない事に驚愕するしかなかった。

人払いの結界は、退魔士が退魔を行う際によく使用する『魔法の一種』で、一定の範囲内の普通の人などをこの世界とは少し『離れた世界』に移動させる。ずれた世界にいる人達は普通に生活出来て、結界の外に自由に出入り出来るけど、結界の中（元の世界）にいる存在は、結界を張ったものの許可なしには出入りが出来ない仕様になっている。だから、退魔する対象をその範囲内に閉じ込める場合にも使っただけど……。

っと言うか、今深夜よ。なんで女性、が一人で公園にいるのよ！？

っと心の中で怒りながら、私は一気に間合いを詰め、影狼に斬り掛かって、倒れている女性から離す。

剣先を影狼に向けながら、倒れている女性を見ると、女性は意識があつて、血を流している片腕を抑えていた。

「……お姉さん大丈夫？」

「え？ええ」

頷く女性……お姉さんは流れている血の量にしては元気があつたので、私は視線を影狼に向けた。

改めて影狼を見ると、何かを食べていて……え？食べてる？その事に気付いた私は、改めてお姉さんを見ると、お姉さんは抑えていた腕から手を離していた。

そこには血を流しているはずの傷が何処にも無くて、ただ破れて血の染みた袖があるだけ。

それでピンときた。ううん。結界の中にいる時点で気付くべきだった。

だから、思わず思った事を口にしてしまう。

「お姉さん。何者？人間？」

「え？」

「え？つて……」

私の問いに呆けるお姉さん。

仕方がないので、私は私の中にある力との『共鳴率』を上げた。それでようやく気付いた。

お姉さんは人間。だけど、そのお姉さんの血に……いえ……その身体に、『膨大な魔力』が『蓄積されている』事に……

相島

私の身体は普通の身体じゃない。

それには気付いたのは、私が幼い頃、お腹に出来た『宝石みたいな石』を取り出す為に病院に入院した時。

その時は麻酔で眠らされていたから分からなかったけど、石を取り出そうと私の身体をお医者さんが切ると、切った所から身体が急速に『再生』されてしまって、石を取り出す事が出来なかった。

その事が切っ掛けに、私は何度も誘拐されそうになったりして、その度に誰かから逃れる様に何度も私の家族は引っ越し……両親は離婚してしまつて……。

だから、私は自分の身体の事が嫌いだった。

その身体のおかげで普通の人以上の身体能力を持つてたり、病気とか怪我とかしても直に治ったから病院知らずだったけど……。

「まあ、なんでもいいや。今はそれどころじゃないし」

私に人間？つて聞いてきた女の子がそう言つて、私のバイクを見た。

「あれ、お姉さんのバイク？」

「そうだけど……」

「じゃあ、直ぐにエンジン点けて」

「え？」

「ここから逃げるの！」

それまで余裕のあつた女の声が、急に焦つた声になったので、私

は女の子の視線が向けられている方向を見た。

そこには黒い狼がいて……………その身体が分裂した！

第一話『戦巫女と不幸な彼女』 3

?????

体中に満たされる膨大な魔力。

それにより今まで感じた事がないほどの力がみなぎるのを感じ、

影狼は高まり、一気に増えた『分裂体』と共に一斉に遠吠えをした。

相島

遠くから物凄い数の遠吠えが聞こえる。

急いでたからヘルメットはしていないけど、走ってる最中なのに聞えるって事は………とんでもない音量のはずなんだけど………町の方に何の変化も起きていなかった。

深夜だから寝ている人がほとんど何だと思うけど………それにし
ては反応が無さ過ぎるし………何なこれ………夢?………そんなわけ
ないか………だって、もう痛みは引いたけど、あの痛みは本物だった
し………。

「次の十字路を右に曲がって!」

大声で私に行先を指示する女の子。

私はその指示に素直に従いながら、

「どこに向かってるの!？」

「あの影狼を倒せる場所よ!」

質問すると女の子は律儀に答えてくれた。

「影狼?」

「あの黒い狼の事!!」

「………ねえ、あれっていったい何なの!？」

「知らないの!? そんなに膨大な魔力を持つてるのに?」

「魔力? 魔力って魔法とかそう言うの?」

「そう言うのだけど………お姉さん。本当に何も知らないの?」

「えっと………知らないっと思う」

ヒロイン

どう言う事？本当にこのお姉さん何も知らないみたいだし……これだけ膨大な魔力を持つていながら、今の今まで『こつち側に関わってこれずに済んでるなんて……ありえるの？今回みたいに、その魔力のせいで結界内に入っちゃったり……とか……運が良いのか悪いのか……』

私は周囲を警戒しながらお姉さんの言葉の真偽を考えていた。

……でも……考えて見れば、共鳴率を上げるまでお姉さんの魔力を一切感じなかった……これってとんでもない『隠匿性』を持つてるって事だよな……なら一般人のままではいられたのは……納得出来る事かな？

そう結論に至った時、後ろから無数の気配……殺気を感じた。

相島

「お姉さん！もっとスピードを上げて！！」

不意に黙った女の子が、また不意に大声を上げた。

「ここま町中だよ。そんなにスピードは……」
って言った時、バイクの横を何か並走し始めた。

釣られて視線を向けると……そこには物凄い数のもの影狼が！
何で！狼だからってバイクの速度に追いつけるはずが！？

「お姉さん！」

耳元で再び大声で呼ばれ、私ははっとして、バイクのスピードを上げた。

ヒロイン

……仕方ない……

「お姉さんバイクの運転上手いよね」

「え？あ！うん……国際A級ライセンス持つてるからね」

うわお！何この人！そんな物を持ってながら、何であんな公園に

一人でいるわけ？………つて、今はそんな事とに驚いている場合じゃないや………とりあえず、それだけの技量があるなら、

「じゃあ、私が多少暴れても平気よね？」

「ちよ！何をする気！」

「決まってるでしょ？」

私が視線を影狼に向けると、影狼の大群が徐々にバイク近付き始めてる。

「あれを倒しながら進むの！」

第一話『戦巫女と不幸な彼女』 4

相島

「あれを倒しながら進むの！」

そう言った女の子は私の腰から片手を放し、一本の黒い木刀を『出現させた』。

公園から逃げる時に、まるで女の子の手から吸い込まれる様に木刀が消えたから……もしかしてって思ったけど……あの木刀、女の子の中にあつて、女の子の意思一つで出たり引つ込めたり出来る見たい。

この子……何者なんだろう？

そう疑問に思ったけど、そんな事を考えている暇はなくなつた。並走する影狼の一匹が私達に向かつて飛びかかつて来たからだ。

女の子はその影狼に木刀を突き刺した。

その瞬間、影狼が霧散したので、私は驚くしかなく、

「倒せるじゃない！」

って思わず言つてた。

「倒せるけど、あんなにいつぺんに一人で倒せつて言つのは？つと言つか、ちゃんと前向いて運転してよ！」

「え！？あ！ご、ごめん」

ヒロイン

別にいつぺんに倒せないわけじゃない……でも、『それ』をやると凄く疲れるんだよね……それに倒せたとしても、今、全部倒すのは難しいし……

「うわ！何あれ！？」

お姉さんの声に前を向くと、かなり遠くで、影狼が街灯とかの光で出来た影から続々と『這い出して来る』のが見えた。

……このお姉さん。退魔士として鍛えられた私並みに目がいいみ

たいね……本当に一般人？

影狼は、その名の通り、影に関する能力をいくつか持っている。影の出来る場所なら、魔力さえあればいくらでも数を増やせたり、今みたいに影から影へと移動する事だって出来るんだけど……おかしいな……そう言う移動系の力も封じる設定を結界にしてたはずなんだけど……考えられる事は、結界の抑制を押し退けるほどパワーアップしてるって事だよね……このお姉さん、どんだけ魔力を持ってるんだろう？

「ねえ！どうするの！」

後にも、横にも影狼がいるのに、前からも影狼が迫る。

このままじゃ。って事なんだろうけど……そんなの、答えは決まってるじゃない？

「このまま直進！」

「分かった！直進ね？って直進！？」

「いいから任せて！」

相島

任せてって……ああもう！どうなっても知らない！

横から後ろから飛び掛かってくる影狼を、黒い木刀で倒す気配を感じる。

一撃で倒せるのはいいんだけど、一本だけじゃ、しかも、前から一斉に襲ってくる場合はどうするの？

その答えは、直に出た。

前に現れた影狼達が一気に迫り、一斉に飛び掛かってくる。

まるで黒い壁の様に！

ぶつかる！

思わずそう思った瞬間、

「はあああああ！」

女の子の気合いの掛け声と共に、メキメキと、まるで『植物が急激成長するかのような音』が聞え、頭上で大きな風切り音がし

た。

同時に影狼が全て掻き消える。

その光景に思わず後ろを振り向くと、女の子は器用にバイクの上に立ち上がり、まるで居合抜きでもしたかのような格好をしていた。そして、その振り抜けた手に、五本の『黒い枝』が生えていて、その黒い枝の先端には黒い木刀が絡み付いている。

その枝には重さが無いのか、結構な長さを横に伸びているのに、重心の変化は感じなかった。

驚きのあまり、思わず

「何なのそれ！？あなたこそ人間なの！？」

って言うてしまい。すぐに、しまった！って思った。

人間なの？って聞かれて、喜ぶ人間はいないでしょ？

ヒロイン

お姉さんのもつともな質問に、私はちよつと苦笑した。

まあ、同じ質問をしちゃったし、これでおあいこかな？

……………とりあえず、

「人間だよ！……………只単、こつ言つのを倒す事を生業としている退魔士だって、だけ」

そう言いながら、私は黒い枝が生えた手を振りまわして、後や横にいる影狼をかき消す。

「つで、その退魔士は一族ごとにそれぞれ独自の能力・退魔士能力を持っててね。私の一族は、この『黒き大樹』な」

不意にくらつと来てしまい、お姉さんの肩に手を置いてしまった。「どうしたの！大丈夫！？」

心配そうなお姉さんの言葉に、私は見えないだろうけど笑みを浮かべた。

「大丈夫。ちよつと疲れただけ……………」

「疲れた？」

「うん。この樹、体力を結構消費するんだよね……………お姉さんに

会う前にも結構使ったから、そろそろ限界かも……………」

相島

「限界って……………」

不安な言葉を口にする女の子。

でも、女の子は私の肩に置いている手にギュッと力を入れ、

「大丈夫……………後もう少しで、終わるから」

って言った。

それと同時に、前方に大型スーパーが現れる。

「お姉さん。あそこの駐車場に入って」

第一話『戦巫女と不幸な彼女』 5

?????

力が漲る。

今までに無い以上に自分を増やしていると言うのに、影狼は力の衰えを感じず、空腹も感じなかった。

だから、強い欲求が生まれる。

ああ、もつと喰いたい。

ああ、あの奇跡の存在をもつと喰いたい。

その欲求と、それまで感じた事がない力の漲り様に、影狼は、だから、あれは邪魔だ。

そう思い、邪魔な存在を殺す為に、増やした自分を一カ所に集める事にした。

影狼はあまりの強い欲求と高揚に、失念していた。

自分を一カ所に集めたせいで、自分がどうなったのかを。

そして、自分が相対している相手が、自分の、

『天敵』

だと言つ事を。

相島

女の子の腕から生えた黒い樹が、まるで女の子の身体に吸い込まれるかの様に消えるのと同時に、スーパー駐車場前まで来るけど、とつくに閉店しているから入口にはチェーンが掛けられている。

……んゝ出来なくはないか……。

「しっかり捕まってるね」

「え？あ！は」

言葉通り私の腰にしっかり捕まる女の子を確認して、減速していた速度を一気に上げる。

そして、歩道のコンクリートブロックを利用して、強引にバイク

を飛び上らせ、一気にチェーンを越え、バランスを取る為に一時停止。

「お姉さん。凄過ぎ……スカウトしていい？」

そんな事を後ろから言われたけど………冗談かな？

女の子の息が徐々に荒くなっているのを感じつつ、

「次は？」

「駐車場の真ん中に魔法陣があるから、そこに入って！」

女の子にそう言われ、広い駐車場の真ん中に視線を向けると、確かにそこには光る塗料で書かれた魔法陣があった。

そこに向けてバイクを走らせよとした時、背後から物凄い足音が聞え出した。

少しだけ後ろを振り返ると、今まで以上の数の影狼がこちらに向かって走ってきているのが見える。

血の気が引くのを感じつつ、バイクを走らせる。

駐車場には、ちらほらと不法駐車らしき車があつて、駐車場の外にある街頭からの光が当たって影を作っていた。

その影の一つが、進行方向上の一つ。

直感的に、バイクを無理矢理曲がらせる。

その直後、影から影狼達が飛び出し、曲がらなかつたら通つたであろう場所を埋め尽くす。

曲つた先にも影が在って、影狼が湧き出している。

今の状態の女の子に、さっきみたいな事はさせられない。

だつたら！

「さつきより、しっかり捕まつてて」

私の言葉に、女の子がギョツと私の腰に抱き付くの感じると同時に、湧き出した影狼が私達に飛び掛かってくる。

私は重心バランスをわざと崩し、バイクを横にスライディングさせて、飛び掛かった影狼の下を滑り抜けた。

影を越した辺りで、ブレーキと勢いを使って無理矢理バイク立ち上げらせ、一気に魔法陣の中に入り、バイクから飛び降りて、転が

る様に魔法陣の中に止まった。

かなり痛いと思ったんだけど……何故か痛くない。

理由が分からず地面を見ると、そこには黒い枝と葉っぱがあって、私と女の子を守っていた。

ヒロイン

黒き大樹は、普通に使えば実体を持たない樹だけど、やろうと思えば実体を持たせる事が出来る。

それを利用すれば、葉などを出して物理防御にも使えるんだけど

……。

共鳴率を落とし、伸ばした黒き大樹の枝と葉を枯らして、身体の外に出ている分を消す。

立ち上がるうとしたけど、さっきより強い意識の揺らぎを感じて、お姉さんに身体を支えられてしまう。

「ありがとうお姉さん……でも」

ちらつと盛大に転がったバイクの方に視線を向ける。

「いいのバイク？」

「あははは、いいのいいの。命あつての物種だからね」

そう言いながら、ちよつと涙目になつてるお姉さん。

「後で弁償するね」

そう言いながら、私はお姉さんから離れ、魔法陣の中心に行く。

同時に影狼が私達の周りを取り囲むけど、魔法陣の光に邪魔されて、私達に襲い掛かつてくる事はない。

「あれ、子供に弁償出来るほど安いものじゃないわよ？」

周りの影狼を気にしながら、そんな事を言うお姉さんだけど……

…私を只の女の子だと思わないで欲しい。

「今回の退魔が成功すれば、高級車を買ってもお釣りが十分出るぐらい報酬が入るから気にしないで」

第一話『戦巫女と不幸な彼女』6

相島

高級車を買ってもお釣りが十分出る？…………… どんだけ稼いでるんだろうこの子…………… 明らかに中学生ぐらいなのに…………… 私より遥かに収入があるなんて…………… かなりシヨック…………… 退魔士って儲かるのね…………… 私もなりたいわ。

ちらつと周りを取り囲んでる影狼を見る。

鋭い牙と爪が空を切り、コンクリートの地面をあつさり削ってた。

…………… 前言撤回。なりたくないです。

魔法陣の中心に立った女の子は、制服の内ポケットから携帯電話を取り出し…………… 溜め息を吐いた。

何となく気になって画面を見ると、『エレア』って人からの着信が履歴を埋め尽くしている。

…………… 外人よね？…………… どう言う関係なのかしら？

女の子は携帯を操作し、画面に地図を映し出す。

その地図には黒い点が無数にあつて…………… 中心に黒い点が密集している事からすると、黒い点は影狼を表しているのはいるのは間違いないけど…………… 町中にいる影狼がここに集まり始めてない？

「…………… これってまずくないの？」

徐々に徐々に影狼が魔法陣の中に入り始めている。

それと共に、魔法陣の外の影狼がまるで壁の様になって、後もう少いでドーム状になりそうだった。

それでも女の子は辛そうな顔をしながら、

「大丈夫。後はこの魔法陣の中に、この黒き大樹を」

そう言つて掌から黒い樹を生やそうとして…………… 女の子はふらつと倒れ掛けたので、私は慌てて支えた。

「大丈夫！？」

「…………… 変だな…………… 何かいつもより魔力消費が激しい様な……………」

そう言いながら、女の子は、私を見た。
そして、目を見開いて、ぱっと私から身体を放した。

……？

「お姉さん。もしかして！魔力吸収能力者？」

「何それ？」

「しかも無自覚って……もしかして、身体のどこかに宝石
みたいな石が出来てない？」

どうしてその事を！？

私が驚きのあまり目を見開いていると、女の子はやっぱり言う
顔をして、

「前に聞いたことある。そう言う病気があるって」

「病気！？」

「こっちの遺伝子病気だから知らないのは無理はないけど……
確か『無意識魔力吸収蓄積病』」

……なにそれ……

「周囲の魔力を無意識の内に吸収してしまつて、体内に蓄積して
しまう病気で……身体に出来る石は、魔力が圧縮されて物質化し
た『魔石』なの……多分だけど、影狼に食べられた所にも魔石が
あつたんじゃない？」

「……そう言われてみれば……確か、最近小さいのが出来て
た様な……いつもの事だからあまり気にして無かつただけ」
「いつもの事って……」

ヒロイン

これで納得した。

お姉さんの傷の治りが異常に早いのは体内に蓄積された膨大な魔
力が原因で、影狼が結界の力を超える程の力を持つ様になったのも
それが原因。

……でも、確かこの病気の発病者って……大体が幼い頃
に『重要器官に魔石が出来て死んでしまう』か、『魔力探知に特化

した魔物に喰われる事』が多いって聞いていたけど……………どんだけ運いいんだろうこのお姉さん。

……………とにかく、物凄くまずい状況になって来た。

この病気の発病者は、周囲の魔力を吸収してしまう病気。

その対象は、周囲を漂っている魔力をだけでなく、発病者に接触している魔力保持者の魔力まで奪ってしまう。

それを触れる側の魔力保持者が意識すれば防げる程度の力なんだけど……………私はそれに気付いていなかったから、バイクに乗って逃げている最中、ずっと魔力を奪われ続けていたわけで……………魔法陣の力を発動する為に取って置いたはずの魔力がなくなっていた。

……………正確には、黒き大樹をコントロールする為の魔力だけ……………どうしよう……………。

今、私達を守っている魔法陣を、本来の目的で発動させる為には、大量の魔力が必要で……………ん？大量の魔力？

……………あるじゃない。目の前に。

思わずにやっと笑ってしまつと、お姉さんはビクツとした。

第一話『戦巫女と不幸な彼女』 7

???

ああ、そこに、そこに！目の前に、奇跡の存在がいると言つのに……届かない。

不可視の壁に邪魔されて、届かない。

……だが、後少しで……壁は壊れる。

そう思った影狼は一斉ににやりと笑った。

相島

壁となつた影狼達が一斉に笑った。

それを見た私は、ぞわつと背筋が寒くなつたけど……そんな事より、

「本当にやんなきゃいけないの？」

「さつき説明したでしょ？そうしないと、この魔法陣の真の機能が起動しないって！」

私の躊躇に、疲弊している女の子は怒った表情になった。

それは聞いたけど……だからって……。

思わず手に持った物に向ける。

それは……とてもよく切れそうなナイフだった。

さつき女の子に渡されたんだけど……よく見ると細かい文字らしくものが書かれていて……女の子の話だと、これには魔法による再生を阻害する力があって、これで傷付けると私の身体でもしばらく傷が再生しないって話だけど……うう、やっぱり自分で自分の身体を傷付けるのは……ちよつと……。

よく分からないんだけど、影狼達がこの魔法陣に入ってこれなくしているのは、魔法陣の本当の機能じゃなくて、魔法陣の中心に組み込んである『ある物』を封印するのが本来の機能で、その封印の余波で、影狼達は入ってこれない……との事……そして、そのあ

る物の封印を解く為には、大量の魔力が必要で………女の子の魔力は、これまたよく分からないんだけど………私のせいで封印を解けるほど残ってないらしくて………っで、私にその代わりの………血を使うと………。

いくら傷の治りが早いからって………痛いのはやなんだけど………。

ちらっと女の子を見ると………なんだか今にも意識を失いそうな感じだった。

私のせいでペース配分を読み間違えたって事なんだけど………ええいい！年下の女の子に、ここまでさせてるんだ！大人の私がちよつと自分を傷付けるぐらいで躊躇してどうする！がんばれ私！

ちよつと震える手で、ナイフの先を親指に刺し………痛いのを我慢して………流れてきた血をぼたぼたと魔法陣の中心に落とす。

その瞬間、パッキンっと言う音と共に、魔法陣が消失した！？

魔法陣が消えた事により、一気に迫る影狼達。
思わず隣の女の子に抱き付き目を瞑ってしまう。

………あれ？………？

いつまで経っても、何にも起きない。

恐る恐る目を開けてみると………月に照らされた黒い樹の森が目の前に広がっていた。

ヒロイン

お姉さんの血が魔法陣に落ちると共に、そこに含まれている膨大な魔力が、魔法陣により封印されている黒き大樹の枯れ枝に急速に吸収された。

黒き大樹は、魔力を糧とする寄生樹で、私の一族が代々退魔士能力として受け継いでいる。

だから、一族は長年黒き大樹の研究を行っていて、その研究で生まれたのが、これ。

本来、私達の身体から出た黒き大樹は、宿り主からの魔力供給を

断たれると、他から魔力を吸収しない限り、枯れて、消滅してしまう。

それを魔法陣の魔法力で、無理矢理消滅するかしないかの所で維持している。

その魔法力の余波で、魔法陣を使用した人間とその人間に触れているものしか魔法陣上には入れなくなっていた。

だけれど、お姉さんの血の魔力で活性化した黒き大樹は、魔法陣の魔力を喰らい、あっさり消滅させてしまう。

その刹那、影狼が一気に迫って、小さな悲鳴を上げてお姉さんが抱き付いてきたけど、丁度良かった。

お姉さんが抱き付かなきゃ、私の方が抱き付いてたから。
何故なら……

迫る影狼が、地面から急激に伸びた黒き大樹の枝に次々と貫かれる。

活性化し、私の制御を受けてない黒き大樹が、自分の存在を維持する為に、手当たり次第に魔力を求めて爆殖しているっと言うわけ。そのあまりの勢いと早さに、影狼達は悲鳴すら上げる事なく消滅し……

「え!？」

っとお姉さんが驚きの声を上げる頃には、私を避ける様に黒き大樹の森が出来ていた。

黒き大樹には、同じ大樹の魔力を求めない性質があつて、こんな風に爆殖した場合でも、それは適応される。

だから、黒き大樹を身に宿している私には黒き大樹は襲い掛かってこないの、お姉さんに抱き付く必要があつただけど……魔力が限界まで少なくなっているこの状況で、お姉さんに、魔力吸収能力者に触られるのは……きつかったかな……。

そう思った時、黒き大樹の森が魔力不足で消滅するのを確認しつつ、私は意識を失った。

第一話『戦巫女と不幸な彼女』 8 (終わり)

ヒロイン

普通の人間なら、魔力がなくなっても意識を失う事はない。

けど、私達には維持する為に常時魔力を消費する黒き大樹が宿っている。だから、今ある魔力が無くなれば、新たな魔力を生じさせないといけなくて……。実はそれは物凄く意志力を消費する行為で……。だから、黒き大樹を操る度に魔力を補充していると、最終的には意識を失ってしまう。

普段は、そこを踏まえて、ペース配分を考えて退魔をするけど……。今回は色々あって……。出来なかった。

……。こうなると……。もう一人仲間が欲しいかな……。そんな事を思いながら、目を覚ますと、目の前に心配そうに私を見ている。

「大丈夫？」

「はい。大丈夫です」

そう言っただけは上半身を起こして周りを見回すと、スーパーに置かれていたベンチに寝かされていたのが分かった。

まだ夜が明けてない所からすると、気絶してからまだそんなに時間は経ってないんだろうけど……。お姉さんも、私も無事だった事からすると、影狼は思惑通り全体倒せた見たいね……。一匹でも来て無かったらどうしよう？とちよっと思っただけ……。考えて見れば、お姉さんって言う極上の『餌』があるんだものね。知能が低い魔物ならなおさら……。

「何か飲みたい物はある？」

そう言っただけ、お姉さんは近くの自販機の前に立った。

「えっと……。じゃあ、コーラで」

「うん。分かった」

自販機でコーラを二本買ったお姉さんは、

「はい。どうぞ」

っと魅力的な笑顔を浮かべてコーラを渡してくれる。

そこで初めてお姉さんの顔をまじまじと見る事が出来た。

今の今までお姉さんの容姿に注意が行くほど余裕がなかったから気付かなかったけど……お姉さんって、カッコいいと言うより可愛らしい容姿をしてるのね。さらさらな黒髪のロングヘアがその容姿に似合ってるけど……バイクとか自在に操ってたから、つい、カッコいいイメージを抱いてたけど……ついでに言えば、もっとセクシーな身体付きをしているイメージもあったりしたけど……結構貧相な身体付きをしている。私よりはまして、バランスが取れるからそんなに違和感はないけど……。

私がじーっとお姉さんの身体を見てると、お姉さんは戸惑った顔をしたので、私は目をそらした。

……何となくだけど……お姉さんとは気が合いそうな気がする……それに、こんな人材を表の世界に置いとくなんて勿体無い。そう思った私はお姉さんの顔をじーっと見て、

「お姉さん。私の所で働く気はない？」

つと言つと、お姉さんは固まった。

？

相島

コーラを女の子に渡す時、初めて女の子の容姿をはっきりと見る事が出来た。

それまで、容姿の事を気にしている余裕はなかったからだけど……

……ちょっと目付きが鋭いけど、間違いなく美少女だった。

でも、残念なのか年相応なのか、女子高生の格好をしてなければ、ショートカットな事も相まって男の子を間違えそうなほど貧相な身体付きをしている。

……まあ、私も人の事を言えた義理じゃないと言えはないけど

……。

そんな事を思っていると、女の子がじーっと私の身体を見ていないので、ちよつと戸惑った。

……もしかして、同じ事を考えていたとか……まあ、そんな事はありませんか……。

ふいつと目をそらした女の子は、ちよつと考えて、私の顔をじーっと見て、

「お姉さん。私の所で働く気はない？」
つと言った。

……中学生にそんな事を言われる大人って……私だけだろうな……でも、この子なら、そう言う事も出来るんだろうな……もしかしたら、さっきのエレアって人も、この子に雇われているとか？

「住む所も、私の家で良ければ一部屋貸しますし」
思わぬ提案に、私はちよつと驚いてしまった。

「さっきの公園の様子だと、お姉さん公園で野宿でもしてたんでしょ？住み込みの仕事を手になったとか？」

……そこまで読まれていると……何だか情けなくなってきた……でも、事実だし……。

「退魔士は言わば危険職ですけど、その分、報酬はいいですし、依頼者は大体国とかからですから、報酬を踏み倒される事もないですから不況にも強いですよ？」

国？……大きな話になって来たな……。

「それに、実際の退魔は私がいましますし、今日はいませんが、他にも二人雇ってますから、滅多なことではお姉さんに命の危険が及ぶ事はないと思いますよ？勿論、それなりリスクはありますが、お姉さんのスキルと魔力なら、ちゃんとした装備を用意すれば、影狼だつて倒せますよ」

……なんか、随分私の事を評価してくれている様な……そんな事って今までなかったな……中学生に雇われるって言うのは大人としてどうかと思うけど……背に腹は代えられない状況でも

あるし……それに、私の身体の事も……遺伝子病だったけど……
……を治す方法も

「言い忘れちゃったけど、働いてくれるなら、お姉さんの身体の事もこつちで何とかしますよ？ただで」

ただ？……魅力的な言葉ね……何だかここまで駄目押しされて断るのも……なんだよね。

「分かったわ」

私がそう言っただけで、女の子は満面の笑みを浮かべ、

「じゃあ、契約成立ね。これからよろしく」

つと言って手を差し出し、小首を傾げた。

「……そう言えば、ごたごたしてたから聞いてなかったけど、お姉さんの名前は？」

……言われてみれば、お互い名乗ってなかっただけ？

「あたしの名前は、相島 命子……あなたの名前は？」

握手をしながら名乗り、女の子に名前を聞く。

「私の名前は『夜衣花』。日本五大退魔士が一つ、『黒樹』家の次期当主『黒き大樹の戦巫女』……っってお姉さんに言っても分からないか」

そう名乗った女の子は、年相応の笑みを浮かべた。

第一話『戦巫女と不幸な彼女』 8 (終わり) (後書き)

これで第一話『戦巫女と不幸な彼女』は終了です。

次話は、第二話『不幸な彼女と過保護な武装メイド』の予定ですの
で、引き続き読んで頂けると幸いです。

第二話『不幸な彼女と過保護な武装メイド』 1

「……………えつと……………その……………大丈夫？」

「？……………大丈夫ですけど？とっても美味しいですよ」

「……………それならそうでいいんだけど……………」

?????

通勤中のサラリーマンや通学中の学生などが大勢いる駅で、一際注目を集めている女性がいた。

透き通るような白い肌。キラキラと輝かんばかりの金髪のポニーテール。南の海のように澄んだ青目。スレンダーで誰もが見惚れるナイスボディ。

容姿だけでも人を惹き付けるのに、その格好は更に注目させるものだった。

それは通学・通勤ではまず見られない『メイド服』。

その女性は、メイド服をさも当然と着こなしている。

そんな彼女に、注目が集まるのは、当然と言えば当然だが、その注目を彼女は特に気にしていなかった。

彼女にとってその他人の視線はいつもの事なのか、どうでもいい事なのか……………若干早歩きで駅の外に出ようとしている所からすると、後者であるかもしれない。

不意に、彼女は立ち止まり、目を鋭くした。

そして、再び歩き出し、柱の陰に隠れた瞬間、彼女の姿がどこにもなくなる。

通勤通学中と言う事もあり、彼女に集まっていた視線はほとんどが刹那的なものだったので、彼女の姿が消えた事に疑問符を浮かべる者はいなかったが……………それはあくまで通勤通学中の者達のみで、駅の清掃をしながら彼女の姿を追っていた清掃員は一人驚愕の表情を浮かべていた。

ゴミを拾う振りをしながら、メイドが消えた場所が見える位置に移動するが、そこには誰もいない。

清掃員はどこかに連絡する為か、携帯電話を取り出そうとし、固まった。

背中になかを押し付けられ、

「あなたはどこのどなたですか？」

つと言われたからだ。

清掃員が近くにあったガラスで背後を確認すると、そこには黒髪黒目のスーツ姿の女性があり、背中に押し付けている手には、身体で上手く隠して持っているサイレンサー付き小型拳銃があった。

その顔を見ると、いつの間にかスーツ姿になり、髪も目も肌の色さえ日本人に変装した追跡対象だった。

ちよつと涙目になっていている所からすると、カラーコンタクトで黒目になっている様だ。

カラーコンタクトに、服装の着替え、髪と肌の着色、小型拳銃の用意、そして、気配を人ごみに紛らせての接近、ほんの僅かの間にそんな事が出来る彼女に、驚愕の表情を浮かべる清掃員。

「質問に答えて頂けません？あなたは、どこの、どなたです？」

二度目の質問を彼女が発した瞬間。

清掃員の姿が薄っぺらくなり、ぱさりと地面に落ちた。

それを確認した彼女は、特に驚くでもなく、拳銃を瞬時にどこかに『消し』、地面を見る。

そこには人型に切り抜かれ、『清掃員』と書かれた紙があった。

その紙には何故かICチップが付いており、その周りには魔法陣の様なものが書かれている。

「『式神』？……………何で東洋系魔法使いが私を？……………」

思わず疑問をつぶやいた彼女は、はっと気付く。

「まさか！夜衣花お嬢様を！？」

夜衣花

ぼろぼろのバイクを引きずりながら、私とお姉さんは駅に向かって
いた。

こっちに向かっている仲間の一人と合流する為だけ……お
姉さんをお姉さんって呼ぶのもなんだよね……ん。

「お姉さん」

不意に私に呼ばれ、若干疲れた顔を私に向けるお姉さん。

……まあ、あれからお姉さんは一睡もしてないものね……私は
意識を失って、ちよつとは回復しているけど……。

「ちよつと休憩しようか？何だったら待ち合わせの場所もここら
辺に変更し」

てもいいから。つと言おうとして、不意に感じた殺気に反射的に
反応して、黒樹刀を出して構えた。

黒樹刀は、見た目は黒い木刀だけど、その切れ味は出した本人の
意思次第で変える事が出来、黒き大樹と同様に自在に自分の周囲か
ら出し入れ出来る。これは黒樹刀が、『黒き大樹を寄生者に繋がっ
たまま刀に加工したもの』だからで……作る際物凄く痛いんだよ
ね……黒き大樹を最大具現化＝最大共鳴してないと作れないもの
だから……それを私は誕生日が来る度に作らされて……思い出
しただけでムカムカしてきた。

「どうしたの夜衣花ちゃん？」

私が不意に黒樹刀を出したので、お姉さんがびっくりして周囲を
見回した。

周囲には誰もいない。

でも、私に向けられている殺気は……確実にある……でも、こ
の気配は……。

カサカサ。

つと紙が動く音がし始める。

「夜衣花ちゃん！」

私を呼ぶお姉さんの声に、その視線の先を見ると、人型に切り抜
かれたぺらぺらの紙が電信柱の陰から現れていた。

そんな紙が次々と、様々な蔭から現れる人型の紙。
それと同時に、人払いの結界が張られる気配を感じた。

第二話『不幸な彼女と過保護な武装メイド』2

?????

その男は、喫茶店のカウンター席でノートパソコンを操作していた。

格好はスーツなので一見するとサラリーマンに見える。

だが、そのノートパソコンの画面を誰かが見たのなら、その頭にはすぐさま？が浮かぶだろう。

画面にはここら一帯の精密地図が映されており、地図上には何故か様々な色の光点が点滅していた。

赤い無数の光点が、青と緑の光点を取り囲むように動いている事からすると、ゲームの様にも見えるが、ゲームにしては地図が精密し過ぎるし、ゲーム性もあまり感じられない。

かと言って、仕事として考えるには、何の仕事でそんな精密な地図が必要なのかよく分からない。

そんな男が、

「……………巻き込んだか」

ポソリとつぶやいた。

その視線の先には、青い光点にぴったりとくっ付いている緑の光点があった。

相島

周りを取り囲む人型の紙達。

これって……………

「夜衣花ちゃん。これも魔物？」

私の問いに、夜衣花ちゃんは首を横に振った。

「多分、これは式神だと思う」

「式神！？あの陰陽師とかが使う？」

「うん。原理的には魔物と変わんないけど、人が作り出して人の

制御下に置かれているものだから、私達は魔物としては分類していないの」

「って事は……何！夜衣花ちゃん。陰陽師とかに恨み買うような事をしたの!？」

私の問いに夜衣花ちゃんは眉をひそめ、小首を傾げた。

「さあ？」

「さあって……」

「退魔士と魔法使いは基本的に対立関係にあるから……知らない恨みを買う事はよくある事だけど……」

それってどう言う事？

って聞こうとした時、式神達が色を持ち、厚み持ち始めて、人間になった!？」

人間になった式神達は、一見するとどこにでもいそうなサラリーマンの姿になって、一斉に夜衣花ちゃんを見た。

「黒き大樹の戦巫女」

式神の内、最も私達に近い式神が喋り出した。

「一般人を巻き込むのは私の本意ではありません。結界の一部を解きますので、彼女をそこから出したいと思うのですがどうでしょうか？」

一般人？……まあ、さっき夜衣花ちゃん達側になる事を決めただけだし、私の病気だか特殊体質だかは、分かりにくいみたいだから、そう思われたんだろうけど……。

ちらつと夜衣花ちゃんを見ると、夜衣花ちゃんは小さく頷いて、式神達に見えない様に携帯電話を渡した。

？……そっか、これで助けを呼べて事ね……分かったわ夜衣花ちゃん。

夜衣花

人払いの結界にはいくつかの種類があつて、結界を張った場所に『人か近付きたくなくなる』や『人が無意識の内に避ける』とかが

結界を張る場所に人がいない時に使われるものだけど、昨日と今使われている種類は『対象を結界内の場所と少しずれた空間に移動させるもの』で、別名『隔離結界』とも呼ばれている。

この人払いの結界は、対象以外の人を近付けさせない以外にも、対象をその結界内の異相空間に閉じ込める効果もあって、そこから自力で出るには、結界を生じさせている魔法具（魔力を流せば、そこに込められた魔法を発動させる事が出来る道具）を破壊するか、同様の魔法で相殺しないと出れない。

前者はその範囲が広範囲であればある程探すのが難しいし、結界を張った相手だって黙って探させる事はないだろうし、後者は、そもそも私は魔法使いじゃないから、そんな器用な事は出来ないし……だから、魔法使いからの提案は、正直に助かったと思った。

昨日の影狼は、ちゃんとした準備とまだそんなに疲労してなかったから、お姉さんを守りながらも大丈夫だと思っただけど……今はちよつとしか休んでないから疲れてるし、装備もほとんどない。そんな状態でお姉さんを守りながら切り抜けるのは絶対無理。

だからと言って、これが畏って可能性もないわけじゃないから、いつでもお姉さんを助けられる様に黒き大樹との共鳴率を上げる。

「こちらへ」

そう言って式神が指し示した場所は何もない所だったけど、黒き大樹との共鳴率を上げた私には、そこに結界の穴が、通常の空間と繋がっている所があるのが分かった。

「お姉さん」

「うん」

戸惑っているお姉さんを促し、その場所に向かわせる。

結界の穴を感じられないお姉さんは、戸惑ったまま穴に足を踏み入れ、その瞬間、姿が消えた。

「どうやら『まともな魔法使い』みたいね……………」。

「さて、一般人はいなくなつたよ。っで？私にどんな用件？」

そう私が聞くと、全ての式神達の両腕が剣や銃に変化した。

「わかりやすいね」

苦笑しながら、私は黒樹刀を構えた。

第二話『不幸な彼女と過保護な武装メイド』3

相島

不意に式神達の姿が消えたので、私は慌てて振り返ると、そこには夜衣花ちゃんも、私の壊れたバイクもなくなっていた。

人払いの結界の外に出れたって事なんだろうけど……………そうだ！

私は慌てて手に隠してた携帯電話を取り出して、着信履歴からこれから合流するはずだった夜衣花ちゃんの部下……………確か、名前は

……………『エレア＝シールド』さん。

……………明らかに外人さんだよ……………別に英語を喋れないわけじゃないけど……………苦手なんだよね……………ええい！そんな事を気にしてる場合じゃない！それに、夜衣花ちゃんとの携帯でのやり取りを見た限り、向こうも日本語を使えるみたいだし……………えい！

ちよつと気合いを入れてリダイヤル。

呼び出し音がちよつとなつて直ぐに繋がり、私が何かを言う前に、

「御無事ですか夜衣花お嬢様！？」

大声が携帯電話から発せられ、びっくりしてまごついてしまう。

その間も、

「先程、エレアを監視する式神を発見したので、もしや夜衣花お嬢様を狙ったのかと思いましたが、携帯が繋がると言う事は、違つた様ですね。エレアはとても安心しました。ところで夜衣花お嬢様先程の話ですが、やはり素性の知れない相手を雇つと言うのはどうかと思います。素性もそうですが、何よりこちらの世界はいきなり素人を引き込んでいい世界ではありませんし、それによりお嬢様の負担が増える事をエレアはとても心配しています」

とても外国人だとは思えない流暢な日本語で、私が話し掛ける隙もないほど喋るエレアさん。

「聞いてますか？夜衣花お嬢様！？」

ようやく言葉の雪崩が止まったので、私は少し深呼吸して、

「あの」

「誰！それは夜衣花お嬢様の携帯のはず！まさか！夜衣花お嬢様をどうした魔法使い！もし、夜衣花お嬢様のお肌に傷一つでも付けて見る！この世に生まれてきた事を後悔する様な殺し方をしてやるからな！」

うわ……いきなりどすの利いた声になった……

「いや、あのですね。私は相島命子って言いました」

「相島？ああ、夜衣花お嬢様が雇うと仰ったと素人か」

………なんか………夜衣花ちゃんに向けた感じと全然違うんですけど………。

「それで、夜衣花お嬢様は？簡潔に答えなさい」

「は、はい。えっと、人払いの結界の中に一人で残って………多分、式神達と戦ってます」

夜衣花

式神達が一斉に押し寄せて来る。

私は両手を剣にした式神を上手く盾にしながら、斬撃と銃撃を避け、包囲網の隙を探す。

両手を銃にした式神は、剣の式神が射線軸上に居ようと構わず銃撃してくる。

何の弾丸かは分からないけど、撃ち出された弾丸は剣の式神の身体を貫通し、私に迫り、私は黒き大樹の枝と葉を出してそれを防御。式神はいくら見た目が人になつたからと言って、その身体は紙だから、盾にもならないし、撃たれた式神も大してダメージを受けている様子はなかった。

これは強行突破しないと不味いかな？

そう思った私は、黒樹刀を持った掌から枝を伸ばし、枝に黒樹刀を絡ませ、振り回す。

振り回した黒樹刀と枝に式神が当たると同時に、式神は只の紙に戻って簡単に切り裂けるけど………全然減った感じがしない。

でも、切り裂かれた紙が式神達の視界を塞いだ瞬間に、両足に根を一気に物理的に生やし、大ジャンプ。民家の屋根に乗って、駆けて同じ様に根を使って隣の屋根に飛び移るを繰り返して逃げる。

後ろから式神達が追ってくる気配がするけど……とりあえず、無視。

これで何とか時間は稼げるかな？
っと思った時、頭部に物凄い衝撃を

相島

物凄い速さで、金髪のポニーテールのメイドさんが走って来て……私にドロップキックをしてきた!?

慌てて避けると、

「避けるな!」

っと思事な着地をして、理不尽な事を言われた。

「えっと……エレアさん?」

「そうよ。そう言うあなたは命子ね。携帯をこっちによこしなさい!」

頷くエレアさんは、ツカツカと私に近付き、手に持っていた携帯電話を強引に奪い、操作し始めた。

……何だかな……。

エレアさんの言動に思う所がないわけじゃないけど……気が立つのは無理もない事だと思うし……それにしても……格好を抜かせば、モデルだって言っても不思議じゃない人だな……エレアさんって……。

つつい『ある』エレアさんの胸と、『ない』自分の胸を見比べ
てしまい……深い溜め息。

……何食べたら……ああ、なるんだろう?

そんな事を思った時、じろりと私を見るエレアさん。

「あなた。確かバイクの運転が上手いんですけどわよね?」

慌てて何度も頷く私。

「じゃあ、手分けして探すわよ！」

そう言ってエレアさんが何もない場所に手を振るうと、円盤の様なもの二つ現れて、地面から上へと移動して消えた。

その円盤が消えた場所に、二台のバイクが現れていて、私は驚くしかない。

「エレアの退魔士能力は、『マイルーム』。異空間に自分の部屋を創って様々な物を仕舞い、自在に取り出す事が出来る能力よ。分かった？分かったならさっさと乗りなさい」

そう早口で言って、エレアさんは素早くバイクにまたがり……
つて、いつの間にかメイド服からライダースーツになってる！？これもマイルームの能力？……とんでもなく便利ね……つて！そんな事より、

「探すつて!？」

困惑しながら残ったバイクにまたがる私に、エレアさんは携帯電話の画面を私に見せた。

そこには……隔離遠隔操作型つと表示されていて……つ
まり、

「式神を操っている魔法使いは結界の外にいるつて事ですか!？
それつて夜衣花ちゃんがいくら頑張つても」

「そうよ。だから、エレア達は、夜衣花お嬢様が限界を迎える前に、魔法使いを見付け、倒さなくちゃいけないの！分かつたら、さっさと行くわよ！」

「っは!はい!」

第二話『不幸な彼女と過保護な武装メイド』4

夜衣花

横に強い衝撃を感じて、私は目を覚ました。

慌てて身体を起こし、黒樹刀を構えつつ周りを見ると、どこかの家の庭だった。

頭部に受けた強い衝撃で気絶して、屋根から落ちたみた……いだけど……。

手を額に当てると、べつとりと血が付いた。

……うわ……黒き大樹の反射防御が、間に合わなかったんだ……。

黒き大樹には、宿り主を守る本能があつて、肉体を損傷させるようなダメージを受けそうになると、勝手に物理具現して守ってくれる。でも、その防御の早さは、宿り主の体調や魔力残量に影響されるから、速い攻撃を受けると、たまに反射防御が間に合わない事もあつて……こうなる。

一応無事つて事は、攻撃角度を変えることぐらいは間に合ったみたいだけど……何をされたんだらう？

私は黒き大樹の毛細根で傷を縫い付けつつ、駆け出した。

庭先から道路に出ると同時に、僅かな殺気を感じ、反射的に首を前に倒すと、コンクリートの塀に穴が開いた。

近くに式神の姿がないつて事は、長距離狙撃！？……なるほど……これにやられたんだ……。

……式神つてそれ自体に意志がないから、殺気とかが僅かしか感じられないんだよね……今回は警戒していたから避けられたけど、これが他の式神に襲われてる最中だったら……避けられたかどうか……万全な状態だったらわけないんだけど……早く何とかして、お姉さん、エレア。

???

喫茶店のカウンター席に座る男は、眉をひそめた。
ノートパソコンの画面には、地図の他に、三つの映像が映し出されている。

一つは塀などに隠れ隠れで駆け抜ける夜衣花の映像。

さきほどそこには夜衣花を狙撃して屋根から映す映像が映し出され、それを見た男はほっと一息吐いたのだが、直ぐに夜衣花が復活したので深い溜め息を吐いた。その額には薄ら汗が出ている。

魔法使いにとって、退魔士を、『特に黒樹家の退魔士』を相手にするのは、それほどストレスを感じ、危険な行為だと言う事。

そして、もう二つの映像には、バイクに乗り、町を疾走している命子とエレアが映っていた。

命子の事を夜衣花の関係者だと言う可能性を考えなかったわけではないが、関係者の割には魔力が全く探知出来なかったのと、その魔力なら例え関係者であろうと脅威にはならないと考え、命子を解放した。結果としてそれが裏目に出た様だが、男はその事に気付いていない。

だから、命子の事をさほど問題にはしていないが、問題なのはエレアの方。

エレア＝シールド。

ヨーロッパでその名を轟かす退魔士一族シールド家の出身でありながら、シールド家の退魔士能力『アルティメットシールド』を受け継げず、その為一族から追い出され、武装メイドになった退魔士一族の退魔士能力を受け継げなかったが、その退魔士能力が変異したマイルームと言う能力を有し、武装メイドの基本スキルである高い近代戦闘スキルも相まって、日本武装メイド協会の中でもトップクラスに入る実力の持ち主と言われている。

事前に調べた情報を思い出しつつ、男は思索していた。

男の魔力は、ほとんど結界と式神の維持に使われている。

本来なら、駅を見張らせていた式神を使って別の場所に用意した

『転移魔法』トラップまで誘き寄せ、直ぐに駆け付ける事が出来ない場所に飛ばすつもりだったが、式神が思いのほか早く見付かってしまったので、それも出来ず。また、隔離結界の中に魔法使いがいない事も簡単に（命子を解放したせいで）見破られてしまい、男にとって徐々にはあるが不利な状況に陥りつつあった。

隔離結界を利用したこの魔法は、ターゲットを安全に処理するには向いているが、結界内にいないターゲット外からの攻撃は非常に弱い欠点がある。

男が式神を使って夜衣花を倒すのが先か、エレアが男を見付けるのが先か。

そんな命のやりとりがこんな場所で行われている事を知らない喫茶店のマスターは、さっきから仕事にも行かずと店にいる男に首を傾げていた。

相島

「武装メイド？」

バイクのヘルメットに搭載された内蔵無線機でエレアさんと会話をしながら、私は町の中を疾走していた。

視線は前とヘルメットに映るリーダーサイトに向けつつ、エレアさんに何でメイド服なのかを聞いて返って来たのが、

武装メイドと言う単語だった。

「武装メイドは、退魔士の家系に生まれながら、退魔士になれなかった女性になる。『こつち側の職業』よ」

「退魔士にも色々あるって事ですか？」

「ちよつと違うわね。退魔士は、退魔士の家系に生まれたからと言って、『正式な』退魔士になれるわけじゃないわ。そもその仕事の数が限られているし、あまり人数がいると『ごまかし』も難しくなる。だから、必然的にあぶれた者や、能力的に劣っていたり、欠けてたりする者は、あっさり家を追い出される。だけど、追い出された者は、男は普通の社会でも仕事を見付け易いけど、女性の場合

はなかなか見付からない。それを憂いた人達が、家を追い出された女性退魔士の為に作ったのが武装メイドってわけ。……もっとも、今では女性でも就職し易い社会になりつつあるから、退魔士の家系じゃない武装メイドが大勢いるのが現状ね」

「……色々あるんですね。退魔士の社会も」

「まあね」

「……でも、なんで武装、なんです？メイドならメイドでいいと思うんですけど？」

「武装メイドはその成り立ちから、仕事の相手が退魔士である事が多いのよ。だから、時として退魔の手伝いもする事があるの。その場合、退魔士能力が退魔士より劣っていたり、そもそも能力を持ってない武装メイドは、文字通り武装してそれを補う。だから、そのせいか、いつの間にか武装メイドって言われる様になって……まあ、話によると、昔は退魔士メイドとか名乗ってたらしいけど、退魔士側に抗議されて、武装メイドって名前にしたとか言う話もあるわね」

「……それにしても、エレアさんって、随分日本語が上手ですよね？」

「武装メイドの基本スキルよ。……まあ、もう十年近く日本にいるのも大きいかもね」

「……なかなか見付かりませんね」

「……あなたね……何の為にあなた何かと喋ってると思ってるのよ！」

「え？」

何故か急に震えた声になるエレアさん。

「気を紛らわせるためでしょうが！」

いきなりの大声に、私の耳がキーンとして、思わずちょっとバランスを崩し掛けてしまう。

「心配で！心配で！心配でたまらないのよ！夜衣花お嬢様あああああ……！」

なんだか発狂したかの様に夜衣花ちゃんの名前を連呼するエレアさんにちよつと引いた時、レーダーサイトに弱い反応が出た。

し当てたんだらうけど……

チラツと後ろを見ると、道路はもちろん、屋根や塀の上まで式神達に埋め尽くされてる。

あまりの不気味な光景に、背筋がぞわつとした。

こういう状況は、『ガルン』とか、『もう一つの退魔士能力』が向いてるんだけど……ほんと、昨日からタイミングが悪い。……

……まあ、それを狙われたんだらうけど……問題は、その情報を『誰が流した』かって事なんだよね……。

そんな事を思っていると、地面に無数の影が走る。

反射的に空を見ると、そこには無数の大きな紙飛行機が飛んでいて、私の見ている前で紙飛行機から人形の紙に戻り、人間の姿になって私の前に着地した。

……なるほど……紙だから、こんな事も出来るのね。

進路を塞がれ、私が仕方なく足を止めると、あつと言う間に式神達に囲まれてしまう。

私はため息一つ吐き、

「仕方ない……じゃあ、力比べといきましょうか？」

その言葉に、式神達はその手を剣やハンマー・ノコギリなどの様々な武器にした。

????

男は自分の居場所が探り当てられたと判断するやいなや、カウンターに一万円札を置き、

「釣りはいらない」

つと違って素早く喫茶店から出た。

あまりの速さに喫茶店のマスターが啞然としていたが、男にはそれを気にする余裕はない。

そもそも、男の魔法は遠距離操作型だが、探知され易い性質がある。

それは媒体として使っているのが、携帯電話の通信システムだから。

らだ。

つまり、式神達には携帯電話と似た構造を組み込んでおり、それにより自在に操っていた。

これにより、古来より使われている式神以上の情報を得る事も、また多彩に精密な作業もする事が可能になり、非常に汎用性が高くなっている。

だが、その反面。従来の通信システムを使っている事により、そのシステムを理解している者になら、簡単にこちらの位置が割り出せてしまうと云う欠点があった。

だからこそ、それを補う為の隔離結界併用使用だった。

これにより、より確実に安全に仕事が出来ていたが……………。

喫茶店のビルから出ると目の前の道路脇に先程結界から出した女がいた。

女は一瞬こちらを見たが、男は特に気にせずその場を去る。

何故なら今の男のノートパソコンは、エレア達が探知していた『式神を操る為に発していた特殊な電子通信』をもう行っていない。

結界維持と式神維持の為の魔力供給は行っているが、その経路は探知されにくいものに変更しているので、直ぐにばれる事はない。

そもそも、男が最も脅威に感じているエレアは、喫茶店を出る前の確認だと、ここから大分離れた所を疾走していた。

バイクで最短距離を走ったとしても、五・六分は掛る距離だ。

それだけの時間があれば、『依頼』は完遂出来る。

最後の通信で、隔離結界内の全ての式神達に自動攻撃命令を出した。

今の夜衣花は前日の退魔の影響でその力の大半を消耗している。

そんな状態で千近い式神を相手に五分も持ち堪えられる訳がない。

ただ、一つの懸念として、『黒き大樹を操る黒樹家の者は、やろうと思えば結界切りもする事が出来る』と言う事だが、それは人が

いる時間帯を襲撃時間に選んだ事により、その可能性を潰している。

隔離結界を破壊すると、本来なら消えるはずの隔離結界内で起こ

った現象や事象が本来の世界に突然現れてしまう。これは、隔離境界が、本来の世界からほんの少しずれた場所である為で、それを強引に本来の世界に繋げると、その世界と同化してしまい、『隔離境界内で壊れたものが、本来の世界でも壊れてしまう』。もちろん、境界内だけにいた『もの』達も本来の世界に突然現れてしまう為、町中で隔離境界が使われた場合は人のいる時間帯では行つてはいけない事になっている。

それは代々国などの人社会と密接な関係にある退魔士達には徹底されている事で、それを破り、社会に混乱を及ぼせば、それ相応のペナルティがその退魔士・その家に与えられる事になっていた。

それらの事を考えれば、境界切りはありえない。

だからこそ、男は勝利を確信し、笑みを浮かべた。

だが、その笑みは直ぐに凍り付く事になる。

何故なら、

「どこに行くのですか？」

そう言つてほほ笑みを浮かべたエレアが、進行方向に立ち塞がったからだ。

第二話 『不幸な彼女と過保護な武装メイド』 6

?????

あまりの予想外な出来事に目を見開く男。

男が喫茶店を出る前に確認したエレア的位置は、喫茶店から大分離れた場所だった。

それなのに、目の前にエレアがいる。

その驚きに、エレアは再び笑みを浮かべ、一枚のカードを取り出した。

ICチップが付いたそのカードには、『転送』と言う文字が書かれている。

男はそれに見覚えがあった。

それは魔法使いではない者でも、転移魔法が使える使い捨ての魔法具。

それは対になっている魔法具で、事前に設置した場所に転移する仕組みになっている。

つまり、喫茶店の前にいた女が、その対のカードを喫茶店に来る前にこの近くに投げていたという事だ。

そして、エレアは退魔士ではないとは言え、退魔士能力を有している人間。

普通の人間と魔力を扱う者のとの違いを見極める事くらいわけがない。

「その使い捨ての魔法具。退魔士側の君がどこから手に入れたんです?」

「答える義理がありますか?」

男の問いに、エレアは表情を消し、どこからかもう一枚のカードを取り出した。

そのカードには『隔離』と書かれており、エレアはそれを自分と男との丁度真ん中に投げ刺した。

カードが刺さると同時に、カードがICチップを中心に開き、小規模の隔離結界が展開。

男とエレアの姿がこの場から消え去った。

もつとも、人払いの結界の一種である隔離結界は、例え隔離の瞬間を見たとしても、普通の人間には直ぐにその事を忘却する様になつており、周囲でその事を気にする人間は一人としていない。

だから、隔離される一瞬、男がした行動に気付いた者はいなかった。

相島

エレアさんの反応が消えた。

つと言う事は、うまく魔法使いを結界の中に隔離出来たって事だよね？

エレアさんの話だと、それで式神への魔力供給が断たれて、少なくとも夜衣花ちゃんの安全は確保出来るって話だけだ……。

私はバイクを路肩に止めて、ヘルメットのディスプレイが指し示しているエレアさんが消えた場所に向かった。

……… ンだけど、当然、そこには何もなく、誰もいない。

この後の行動を特に指示されたわけでもなく、なんとなくこの場に来ただけだ……… ン……… ン……… ン……… ン……… ン………

なんとなく視線を巡らしていると、街路樹の下にノートパソコンが転がっている事に気付いた。

よく見ると電源は点いているみたいで……… 明らかに不自然だった。

……… エレアさんの話によると、現在の魔法使いは、魔法を使う為に何らかのIT技術を使っている事が多いって事だったけど………

……… まさか……… これって………。

恐る恐るノートパソコンを拾い、開けてみると………

?????

隔離結界の中に入った瞬間、魔法使いは内ポケットから一枚の紙を取り出し、地面に刺さった隔離結界カードに投げ付けた。

エレアは反射的にマイルームから拳銃を取り出しその紙を撃ち落とそうとするが、その紙はまるで生き物の様に動き当たらず、カードに巻き付く。

「一体なのつもりです？」

紙を撃ち落とし損ねたエレアはそのまま拳銃を魔法使いに向ける。

「そのカードの制御を奪わせて貰いました」

そう言つて魔法使いは余裕のある笑みを浮かべる。

その笑みと言葉の意味に、エレアは瞬時に状況を理解した。

「『杖』を向こうに置いてきたわね！」

「その通りです。そして、今、この隔離結界は私の支配下にあります。これであなたに戦巫女を助ける可能性がなくなりました」

「……………だつたら、」

エレアはマイルームからもう一丁の拳銃を取り出し、二丁拳銃を魔法使いに向かって構える。

「あなたを倒して杖を破壊しに行くまで！」

二丁拳銃を連射。

連続した発砲音と飛び出した空薬きょうが地面に落ちる。

二丁拳銃のマガジンに入っていた全ての弾丸を撃ち切った。

だが、エレアの目に映ったのは、銃弾に身体を撃ち抜かれた魔法使いの姿ではなく、薄っぺらい紙になってひらひらと地面に落ちる魔法使いの姿だった。

「いつの間に!？」

慌てて周囲に気配を探るエレアに、何処からともなく魔法使いの声が聞こえてきた。

「出来ますか？退魔士にもなれなかった武装メイドに？言っておきますが、あまり時間がありませんよ？私の杖には今、私が持てる限りの魔力を使って総攻撃をする様に命令していますからね」

第二話『不幸な彼女と過保護な武装メイド』7

夜衣花

途切れる事がない式神達の猛攻を、黒樹刀を二刀流にして倒しつつ、射線軸上に仲間が居ようと放たれる銃弾を黒き大樹の反射防御を意識的に使って防ぐ。

絶える事無く当たる銃弾と、それを防ぐ黒い葉が鬱陶しくって仕方がないけど、それ以上に意識の薄れが強くなってきていて……物凄くピンチな状況……。

どう見ても総攻撃だろうから、向こうもエレアが追い詰めているのは確実なただけ……なかなか式神達が止まらない。

……もしかして……エレア、出し抜かれてるんじゃない……。

そう思った時、辺りが急に暗くなった。

反射的に空を見ると……っげ！

そこには太陽を遮るほどの巨大な式神がいて、その拳を今まさに私に振り下ろそうとしていた。

周りの式神達が私の退路を断つ様に動き始める。

これは避けられない！

そう判断した私は、腕をクロスさせて頭上に掲げ、そこから黒き大樹の根を地面に根付くまで出し、私の身体全てを覆い隠した。

空気を巨大な拳を切る音がし、拳が黒き大樹の根に当たる。

黒き大樹の根によって、打ち込まれた拳は霧散しているだろうけど、今の私の状態と式神の大きさからして、その消失した部分は僅かかもしれない。

その証拠に、二撃目が直ぐに来た。

衝撃で根が揺れ、根付いたコンクリートにひびが入って少しめくれる。

打撃は次々と打ち込まれ、その度に黒き大樹が『成長しようとする』

れ、私はそれを必死に制御した』。

黒き大樹は『魔力を喰らう魔法の樹』。

だから、魔法の天敵と言える存在だけど、これには大きなリスクがある。

黒き大樹は、言わば魔法の木。

つまり、養分である魔力を喰らえば、木の本能としてその分だけ成長しようとする。

私達黒樹家の退魔士は、それを制御してその成長のタイミングをずらしたりして黒き大樹を使うんだけど……もし、これを制御しないとなると、私達の身体から溢れ出る様に成長し、辺りの全てを喰らって無限に成長してしまう。

そもそも、黒き大樹は魔力だけを養分にするわけじゃなくて、意志力なら何でも吸収する。

だから、私達の制御下から離れた黒き大樹は、『最強最悪の魔物』になると言われてて……だから、黒樹家の者は、『その身にある黒き大樹と一緒に死ぬ事を義務……宿命付けられてた』。

それを聞いた時は、何言ってるんだろう。って思ったけど……いざ命の危機にさらされた今、私は必死に暴走させない様にしている。

暴走させても、暴走させなくても、どちらでも……死んでしまふのなら、暴走させないで、死ぬ事を私は選ぶ。

それは黒樹家の宿命とか、義務とかじゃなくて……何だろかね。自分でも分からないや。

私は目の前に迫る死に、自然と苦笑めいたほほ笑みを浮かべていた。

???

総攻撃。

その言葉にエリアが顔を青くした。

男はその様子を見ながら、強引に魔力を回復させた事から来る意

識の薄れを必死に耐えつつ、内ポケットから市販されている栄養ドリンクの様なものを取り出し、一気に飲み干す。

本来、魔力の回復は寝ている間にするのが基本だ。

それは魔力を得る行為が激しく意志力を消費させる行為で、起きたままそれを行えば、起きているだけで常に消費される意志力に加え、起きている分だけ『魔力がある場所に意識が持つて行かれやすい』。

だから、それを無理にでも行えば今の男や、黒き大樹の使い過ぎで意識を失った夜衣花の様になる。

男もあのまま何もしなければ、夜衣花の様に意識を失く事になっていた。

それを防ぐのが男が飲んだ栄養ドリンクで、飲んだ人間の意志力を強引に回復させる効果がある。

だが、これには大きな副作用があり、飲んでから数時間後に『必ず意識を失い、一日、悪ければ一年近く目を覚まさなくなる』。

そんなリスクを負わなくてはいけないほど、男は魔力を消費しており、強引に魔力を回復させなければ、隔離結界の制御を奪う事も、式神による空蝉も出来なかった。

しかし、これでエレアには勝ち目がなくなった。

所詮、エレアは退魔士の家系から生まれた落ちこぼれの変異退魔士能力者。

純粋な退魔士であるシールド家の退魔士ならいざ知らず、物を出し入れ出来るだけのエレアに、魔力を取り戻した魔法使い勝てる通りがない。

そう思った男は、予備の魔法杖である携帯電話を取り出す。

その瞬間、エレアは男に向かって銃口を向けた。

男は慌てて携帯電話を前に突き出し、『風景に偽装させていた式神』を硬化させ、それと同時に無数の銃弾が式神にめり込んだ。

「確かにエレアはシールド家の出来そこない……でも、変異しているとは言え、シールド家の退魔士能力を持つ者よ……シールド

家の空間認識能力を嘗めないで貰いたいものね」

そう言ったエリアは、素早く二丁拳銃をマイルームに仕舞い、代わりにガトリングガンの銃身とトリガー部分だけを出した。

「そして、出来そこないの能力でも、応用すれば、女のエリアでも大型火器を扱える！」

ガトリングガンのトリガーが引かれ、大量の弾丸が硬化した式神に撃ち込まれた。

もっともその大量の弾丸でも硬化した式神を貫通する事はなかった。

エリアはそれに舌打ちをして、ガトリングガンをロケットランチャーに交換。

その一瞬の隙を逃さず、男は内ポケットから新たな式神を五枚出し、硬化した式神の影から飛び出し、エリアに向かって投げ、投げられた式神は瞬時に獣になりエリアに襲い掛かる。

エリアはそれをマイルームから『落とす』剣で串刺しにして動きを止め、そのままロケットランチャーを男に向けたその瞬間、獣の式神達の身体が膨れ上がり、エリアがそれに気付いた瞬間、エリアを巻き込む大爆発を引き起こした。

第二話 『不幸な彼女と過保護な武装メイド』 8

生じた爆発を男は硬化したを自分を包み込むように変形させてやり過ぎず。

????

頃合いを見て式神の一部を透過させ、外を確認する。

そこには爆発によってあらゆるものが吹き飛んだ光景があったが、そこに男は違和感を覚えた。

爆発はコンクリートに穴を開け、近くの建物のガラス全てを吹き飛ばすほどの威力だった。

だが、それでも、爆発の中心にいたエレアの『痕跡がない』。

それに男が気付いた瞬間、爆発の中心地、何も無い空間に唐突にロケットランチャーが現れた。

男は驚愕と同時に式神を壁にし、硬度を可能な限り上げる。

同時にロケットランチャーが撃たれ、壁式神にロケット弾が命中。その爆発の威力に硬度を上げた式神は耐え切れずに千切れ飛んだが、その後ろには既にもう一枚の式神が展開されており、それで威力が落ちた爆発は完全に遮れた。

爆発が収まり、再び式神の一部を透過させると、男の目に何も無い空間からエレアが現れ着地するのが入る。

つまり、エレアのマイルームは自分に対しても使えると言う事なのだろう。

もつとも、その場合は出られる場所は入った場所に限定されるのが、今出てきた所（爆発前に居た場所）から分かる。

更に、出てきたエレアが顔を赤くして息を荒げている所からすると、マイルームの中には空気がない様だった。

つまり、攻撃を積み掛ければ、エレアに防げる術はない。

そう理解した男は内ポケットから何十枚もの式神を出し、一斉に空中に投げる。

空中にばらまかれた式神は、一斉に様々な獣の姿になった。驚などの鳥に、狼の肉食獣。

それらが一斉にエレアに襲い掛かる。

しかも、今度は爆発が一回限りで途切れない様に時間差を付けてだ。

エレアはそれをマイルームからサブマシンガンを二丁取り出して迎え撃つが、量の多さと強度に瞬く間に接近を許し、式神が膨れ上がる。

爆発の瞬間、エレアはマイルームの中に避難するが、立て続けに起きる爆発に、マイルームから出る事が出来ない。

勝った。

そう思った男は、油断なく新たな式神を出して爆発を途切れない様にさせながら、制御を奪った隔離結界を操作して電波だけ繋がる様にし、携帯電話をノートパソコンに繋げ様として、眉を顰める。

いくら操作しても、繋がらなかった。

男が魔法杖として使っているノートパソコンは、当然普通のノートパソコンではない。

だから、どんなに乱暴に投げたとしても壊れる事はないし、バッテリー（魔力）切れになる事は、少なくとも後三十分はないはず。

また、誰かに拾われたとしても、男以外は操作できない様になっているから、少なくとも最後に男が入力した命令は実行されているはずだが……

男が色々と思案していると、不意に携帯にメールが届いた。

光のない真っ暗な空間・マイルームに逃げ込んだエレアは、必死に息を止めていた。

魔法使いの予想通り、マイルームの中には空気はない。

勿論、入れようと思えば入れられるのだが、その分エレアに掛る負担が多い為、普段は空気を入れておらず、今回はそれが仇となっ

た。

それを後悔しても意味がないが、少なくとも、酸素ボンベぐらいは用意しておくべきだったと思うエレアは、僅かに伝わる外の気配に変化が起きた事に気付き、眉を顰める。

息を止めるのに必死で、気付くのに遅れたが、いつの間にか爆発が止まっていた。

訳が分からず、恐る恐るマイルームから顔だけ出してみると……

…魔法使いは何処にも居らず、隔離結界の制御も元に戻っている事に気付く。

一瞬、畏かとも思ったが、隔離結界の制御カードを確認してみると、隔離結界から魔法使いが逃げている事を示す。

『結界内から一人回帰』

つと表示されていた。

あれほど優位な状況で、魔法使いが逃げる道理はない。

なのにそれを行ったと言う事は……

「……………まさか！？夜衣花お嬢様！」

最悪な、最も恐れていた事を思い付き、エレアは急いで隔離結界を解除した。

第二話『不幸な彼女と過保護な武装メイド』9

相島

拾ったノートパソコンの画面には、多分ここら一帯の詳細な地図と……画面を埋め尽くすほどの式神と戦っている夜衣花ちゃんが映っていた。

っど！どういう事！？なんで夜衣花ちゃんがまだ戦っているの！？何が何だか分からずおろおろするしかない私に、通行人が不審そうな眼を向けてきたけど、それを気にしている状況じゃなくって……でも、どうしたら……。

そうこうしている内に、ノートパソコンの画面に映る夜衣花ちゃんがよりピンチな状況に、物凄く大きな式神が現れて、夜衣花ちゃんが防戦一方になっていた。

エレアさんはまだ戻ってこない。

何とかしなくちゃ、このままだと夜衣花ちゃんが、でも、私には夜衣花ちゃんやエレアさんみたいな能力は……能力？

ふつとある事を思い出した。

……そうだ！私にはあの病気がある。それを使えば……でも、どうやって？

自分がどんな病気に掛っているか、それが魔法に関わるものだと知ったのは、ほんの数時間前の話だし……それを意図的に起こすなんて出来るはずが……。

そう思いながら何とかノートパソコンを操作しようとガチャガチャしていた時、不意にノートパソコンの画面が乱れた。

？……何か変な事でもしたかな？

訳が分からずノートパソコンを引つ繰り返したりして見てみただけ……傷らしきものはない。故障と言っわけではないようだし、私の操作に反応している感じでもなかった。

首を傾げていると、画面の乱れはどんどん激しくなり……

……何故か、それに合わせて画面の中の式神達の動きが鈍くなり始め、終には唐突に画面が真っ暗になって何も映さなくなる。

……………？……………どういう事？何が起こったの？夜衣花ちゃんはい！？

訳が分からず再びおろおろしていると、不意に目の前に男性が現れた。

????

携帯に届いたそのメールは、隔離結界の外に置いてきたノートパソコンから送られてきたもので、その内容は、

『魔力切れにより緊急シャットダウンがされました』
つと言う内容だった。

あまりの事に、男は固まり、新たな式神を出すのを止めて茫然としてしまう。

意味が分からなかった。

ノートパソコンには、男の全魔力を込めていた。

だから、総攻撃をさせていても、少なくとも後一時間は魔力切れを起こす事はないはずだった。

なのに、魔力切れにより緊急シャットダウン？

何故そうなったのか全く分からないが、男はこれだけは理解した。

男は依頼を失敗したと言う事を。

そう判断した男の行動はすぐさま隔離結界から脱出する。

すると戻った元の場所の目の前に、自分の魔法杖を持った一般人だったはずの女性を確認し、思わず固まってしまった。

相島

現れ方からすると、間違いなく目の前のこの人が……………魔法使いだよね？どう見ても普通の人なんだけど……………

そう思って固まっていると、向こうも何故か固まって……………回復したのは魔法使いの人が先だった。

「……………それ、私のですので、返してくれませんか？」
つと言われたので、私は特に考えなくノートパソコンを差し出し
てしまう。

だって、変な病気に掛っているだけの一般人に、魔法使いの人を
どうにか出来るとは思わなかったし……………何となくだけど、もう大
丈夫な気がしたから……………。

?????

素直に魔法杖が返されたので、多少面喰いつつ、魔力を魔法杖に
送って再起動。

状況を確認すると、予想通り式神は全て機能停止しており、隔離
結界も消滅している。

魔法杖の魔力が無くなったのだから当たり前だが、確認しても男
はにわかには信じられなかった。

目の前にいる女性が何かをしたのは間違いないが……………男には、
どこからどう見ても普通の人間にしか見えない。

魔法使いの性分として、何をしたのか知りたい欲求が生じるが、
今はこの場から逃走する事を優先するべきだ。

何故なら、隔離結界の制御を既に返している。

マイルームの中にもらせていたとは言え、それに気付かない武
装メイドではないだろう。

そして、『檻から放たれた天敵』にわざわざ近付く馬鹿はいない。
そう思った男は、何事もなかったかの様に歩き出し、この場から
速やかに去った。

第二話『不幸な彼女と過保護な武装メイド』 10

夜衣花

流石に疲れた……………。

あまりの疲労から、私は隔離結界が解除された瞬間に、道路の真ん中にへたり込んでしまった。

黒き大樹の使い過ぎから来る疲労だけ……………このままここへたり込んでいるわけにはいかない。

式神や隔離結界に使われていた魔力の気配はまだする。

現代の退魔士が進んで魔法使い狩りをする事はないけど……………少なくとも、敵対行動を取った相手を見逃すほど甘くなっていない。

……………それに、一般人を巻き込まない様に動くやり方は、どう考えても職業的暗殺者である可能性が高い……………っと思う。

もしそうだったら、依頼者が誰か聞き出さないと……………。

そう思った私は、立ち上がるうとして……………倒れてしまった。

危機が去った事で、気が抜けてしまったのかもしれない。

身体に力が入らなくて、立ち上がる事も出来ず……………段々と意識が薄れていく中、誰から私のそばに寄ってくるのを感じた。

それが誰だか確認するより前に、私の意識は完全に落ちてしまったけど……………けど、何故かその人は、私の頭を優しくなでた……………様な……………？

相島

「夜衣花お嬢様！」

倒れている夜衣花ちゃんを見付けたエレアさんが、悲鳴に近い声で夜衣花ちゃんを呼んで駆け寄った。

魔法使いの人がいなくなっただ直ぐにエレアさんが戻ってきて、一瞬何か言いたそうな顔をしたけど……………結局何も言わず、どこからか取り出したヘルメットとバイクに乗って走り出してしまった……………

…私を置いて……………大慌てで路肩に止めていたバイクの所まで戻って後を追うと、道の隅で倒れている夜衣花ちゃんの下に辿り着いたんだけど……………。

エレアさんは倒れている夜衣花ちゃんの身体を一通り調べてほっと息を吐いた。

胸が僅かに上下している所からすると、昨日と同じ様に力の使い過ぎで意識を失っているだけみたい。

それを確認した私もほっと息を吐くと、夜衣花ちゃんを抱えながらエレアさんがじとおーっと私を見ている事に気付いた。

「な……………何でしょう?」

「……………あなた……………何者?どうやってあの魔法使いの魔法を無力化したの?」

疑惑と警戒の視線が私に向けられる。

エレアさんの片手は夜衣花ちゃんを支える為に使われてるけど、もう片方の手は……………何だか昔見た西部劇のガンマンの様にだらんとしていた。

ありありと、返答次第では……………っと言ってる感じで……………

「あの……………夜衣花ちゃんから何も聞いていないんですか?」

「エレアが聞いたのは、こっち側の事を全く知らない素人だけど、バイクの扱いがとても上手なの……………あと……………会ってからのお楽しみとしか聞いてない」

会ってからのお楽しみって……………ん〜でも、私も何が起きたか分かってないんだよね……………とりあえず、

「夜衣花ちゃんは、私が……………えっと……………確か……………無意識…魔力吸収蓄積病にかかってるって言ってましたけど……………」

私が言った病名に、エレアさんは少し考えて、小首を傾げ……………難しい顔をしながら何もない空間から電子辞書を取り出し、調べ始めた。

しばらく待って、エレアさんの顔色がさーっと青くなって、

「そのヘルメットを今直ぐ返しなさい!」

「え？」

「いいから早く！」

「は、はい！」

訳が分からずにヘルメットを渡すと、エレアさんはヘルメットの中身を調べて……がつくりと落ち込んだ。

「……やっぱり魔力切れになってる……」

魔力切れ！？

「これに使ってる魔石、物凄く高かったのよ！どうしてくれるの！」

「どうしてくれるのって言われても……あの、どう言う事なんです？」

困惑している私に、エレアさんはちょっと考えて、

「だから！……あなたの病気が、周囲の魔力を吸収する病気なのは知ってるわよね？」

頷く。

「その対象は、あなたが触れているものに対しても含まれるのよ」

……それってつまり、私が触れているだけで、魔力はほとんど私に吸収されるって事？

「しかも、その吸収する割合は、触れている方が高い……魔法使いの魔法杖……落ちているノートパソコンとかを触ってたでしょ？」

「触ってましたけど……」

「やっぱりね……ああ、そんな事より、どうしよう。これで下手すれば赤字……」

そう何だか嫌な言葉をつぶやき、エレアさんは黙ってしまった。

……つまり、私があのノートパソコンを色々といじくり触っていたから、あの中に入っている魔力を私が知らず知らずの内に吸収して、夜衣花ちゃんを襲っていた式神を止める事が出来た……って事だよな……っと言う事は、昨日、夜衣花ちゃんがペース配分を間違えたのは……こういうことだったんだ……

???

町を抜ける道路を走る車の中に、男はいた。

この車は、男が時間を掛けて作った自立型式神により運転されている。

その式神は女性の姿をしており、男の仕事のバックアップやサポートをし、時には夫婦役する欠かせない存在であり、もっとも信頼している存在だった。

だからこそ、男は彼女の異変に直ぐに気付いていた。

見た目上の変化はない。

だが、妙に静かだった。

彼女に男は喋る機能を付けてはいない。

だが、普段の彼女はその機能を付けなくてよかったと思うほど騒がしく動く。

今日のように、仕事を失敗した時や、薬の副作用で意識が失われそうになっている状態の時など特に騒がしくなる。

なのに、彼女は無反応。

その異変の原因男が確かめるより早く別の異変が起きた。

車がトンネルに入る。

その瞬間、隔離結界が何者かにより展開され、男は車ごと隔離されてしまった。

第二話『不幸な彼女と過保護な武装メイド』 11

夜衣花

目を覚ますと、ふわふわのベットに寝かされていて、見知らぬ天井が目に入った。

「あ！起きた夜衣花ちゃん？」

お姉さんの声でしたので、上半身を起こして声の聞こえた方向を見ると、無数の食器が重ねて置かれたテーブルにお姉さんが座っていた。

「夜衣花ちゃんの家ってすごいね。こんな所にも別荘があるなんて」

そう言っただけで幸せそうな顔をしているお姉さん。

「……………もしかして、これ全部一人で食べたのかな……………どんなお腹してるんだらう？……………それにしても……………別荘？……………ああ！そう言えば町の近くに黒樹家のセーフハウスがあるって言ってたっけ？……………あんまり黒樹家に頼りたくないんだけど……………」

「あ！今、エレアさんが夜衣花ちゃんの方も作ってるから」

私が少し不快そうな表情をしていたせいか、お姉さんが勘違いをして慌ててそんな事を言った。

私はクスツと笑って、

「エレアの料理を全部食べた事は気にしてませんよ。そんな事よ、これだけの量を一人で食べたんですか？」

「え？あ！うん」

何だか恥ずかしそうなお姉さん。

「私、恥ずかしい話だけど、ご飯食べられない日がよくあったから、出されたご飯は全部食べちゃうの」

「食べちゃうのって……………これだけの量を平然と……………今までどんな生活をしてたんだらう？」

「だから、エレアさんが次から次にご飯を作ってくれて……………今日

はとっても幸せ」

……なんだかな……。

「……でも」

？……でも？

「欲を言えば、味付けがちょっと……あ！ううん。食べられるだけで満足だから」

遠慮なのか何なのか、そんな事を言ったお姉さんの言葉に、ある予感がして、お皿を一枚手にとって匂いを嗅いでみた。

……いつものエレアならあり得ない……酸っぱい匂いがする

……こんなのを平然と食べれるお姉さんって……本当に今までどんな生活をしていたんだろう？お腹を壊している様子もないし……

……それにしても……あの女……『また』か。

思わずため息を吐いた時、エレアが料理を持って部屋に入ってきたので、ジトーとエレアを見ると、エレアはびくつとして視線をそらした。

????

トンネル内に張られた隔離結界により男はトンネルの中に閉じ込められた。

自立型式神が男の命令なく車を止める。

男が何かを言う前に、自立型式神はぎこちない動きで男に顔を向け、申し訳なさそうな顔をした瞬間、自立型式神は大量の紙に戻り、崩れた。

そして、その紙の山から何匹もの蜘蛛が現れ、僅かに開いていた窓から逃げ出す。

男の感覚は、その蜘蛛が魔物である事と、自然物でも魔法使用によるものでもない事を感じていた。

つまり、退魔士の仕業。

一瞬、男は今回のターゲットだった黒樹夜衣花を思い浮かべたが、資料は蜘蛛を使う退魔士との接点は無かった。

だが、直ぐに男は思い出す。
蜘蛛使いの退魔士と接点のあるのは、『依頼主』だと。
男は車から飛び出し、パートナーを失った怒りにまかせて叫んだ。
「出てこい！いるのは分かっている！」

相島

「やっぱり何かしてたのね」
ジト〜とした目をエレアさんに向ける夜衣花ちゃんに、視線を
そらすエレアさん。

「な、なにもしてませんよ？」

エレアさんのその言葉に、夜衣花ちゃんはため息を吐いた。

「ふ〜ん……………そう言う事を言うんだ。いいわ。分かった。私、
そんな人とは一緒に寝たくない」

一緒に寝たくないって……………一緒に寝てるんだ……………そんな思っ
たより子供ばい所があるのね。

そんな事を思っていると、夜衣花ちゃんが私を見た。

そして、にっこりと笑って、

「だから、お姉さん。今日は私と一緒に寝よ？」
つと言った。

……………別に一緒に寝る事は構わないけど……………まだ寝るんだ……………つ
と言つか、何だかエレアさんからの視線が痛い。

「そ！そんなあ。こんなどこの馬の骨とも分からない女と夜衣花
お嬢様が寝るなんて」

馬の骨って……………この人、本当に外国人なのかな？

「何？文句あるの？シールドさん」

「はう！……………申し訳ありません夜衣花お嬢様！」

他人行儀で冷たい視線に、思いつきり狼狽するエレアさん。

「分かればよろしい。幸いお姉さんは何ともないみたいだし、こ
れくらいで許してあげるわ」

「ありがとうございます夜衣花お嬢様」

……………それにしても、さつきから夜衣花ちゃんは何に對して怒ってるんだろう？

さっぱり分らない私は小首を傾げていると、

「まずはお姉さんに謝りなさい」

「申し訳ございません相島様」

「????い、いえ？」

謝られてますます困惑する私だった。

第二話『不幸な彼女と過保護な武装メイド』 12 (終わり)

???

「出てこい！いるのは分かっている！」

男の呼び掛けに一拍間を置いて、トンネル先に変化が起きた。

空間の一部に歪みが生じ、そこから真っ赤な着物姿の女が悠然と現れる。

その女は、染めているのか、腰まである髪すら真っ赤で、カラーコンタクトでも入れているのか、瞳すら真っ赤だった。

女は、クスクスと笑いながら、男を見る。

「呼んだ？」

とても朗らかな笑みを男に向けているが、状況に合わない上に、どこかおかしなものを感じさせる笑み。

一瞬、男は悪寒に襲われた。

男は魔法使いだ。

現代の魔法が科学的に再構成され、なる者もしくは使い手に掛る負担が昔より掛らなくなっているとは言え、負担が全く無くなっているわけじゃない。

だから、『狂った人間』なら『よく見ている』。

そんな男でも、女の狂気は、悪寒を抑えきれないものだった。

しかし、だからと言って、男は引き下がれるわけがない。

「これは一体どういう事だ！いくら私が依頼を失敗したからと言って！いや！そもそも、なぜ依頼主がここにいる！？」

その疑問の答えを、真昼はクスクス笑いながら口にした。

「だって、近くにいないと夜衣花ちゃんを助けられないじゃない？」

相島

「ところでお姉さん」

なんのかんで何でか三人で寝る事になり、用意された寝巻きに着替えた時、不意に思い出し様に夜衣花ちゃんが私を呼んだ。

ちなみにエレアさんは、食器を洗いに行ってる……私も手伝わって言ったんだけど……物凄い怖い笑顔で拒否された……仕事を奪うなって事なのかな？

「私が意識を失う前、私の頭を撫でたのって、お姉さん？」
頭を撫でた？

あの場ではエレアさんが私を夜衣花ちゃんに近付けさせなかったし……そもそも、私達が夜衣花ちゃんを見付けた時は、既に意識を失ってたし、誰もいなかったけどな……。

その事を夜衣花ちゃんに教えると、夜衣花ちゃんは眉を顰めて首を傾げた。

……それにしても……

「ねえ、夜衣花ちゃん。その、私の事をお姉さんって呼ぶの止めない？」

私の提案に、夜衣花ちゃんはちよつとだけ目を瞬かせて、笑顔になつた。

「うん。私もそう思ってた……ん〜でも、なんて呼べばいい？」

「何でもいいよ」

「何でも？……じゃあ……」

おずおずつと言った感じで夜衣花ちゃんは、

「みよんネエ？」

つと言った。

……命子だから？……

「……ダメ？」

何だか可愛らしく問われた。

そんな顔されたら……拒否なんか出来ないじゃない。

私はちよつと苦笑して、

「いいわよ。それで」

???

男は困惑した。

殺害を依頼した人間が、殺害しようとしている人間を助ける。

その真意が分からない男は困惑したまま、紙を取り出し十数体の式神を作り出した。

真意が何にせよ。女が男をこのまま素直に帰すわけがない。

迎撃態勢に入った男をよそに、女は何故か右掌を愛おしそうに触りながら笑っている。

「あゝあつ。本当だったら、頭を撫でるだけじゃなくて、抱き付いたり、一緒に寝たり出来ていたのに」

そうつぶやいた女は、不意に笑顔を消した。

その次の瞬間、男の眼前に女の顔が現れ、

「てめえのせいだ。屑男」

男は腹部に痛みを感じた。

ゆっくり視線を下に向けると、そこにはいつの間にか女の手に握られていた『赤い木刀』が突き刺さっていた。

反射的に男は式神を操ろうとするが、式神は応えない。

それどころか、式神達はただの紙に戻り、男は『魔法使いとしての感覚を失った』。

「黒樹家の……魔法……殺し!？」

男の苦しそうに言った言葉に、女は再び笑みを浮かべた。

ただし、今度は朗らかな笑みではなく、残忍な笑みを浮かべて、突き刺した木刀を一気に引き抜く。

男の腹部から血が噴き出し、反射的に腹部を抑えようとする男の両手を、女は斬り飛ばした。

大量の血を流し、男はゆっくりと倒れ、息絶える。

女はその様子をクスクス笑いながら見詰め、男が動かなくなつた事を確認すると、赤い木刀を何度も何度も男の遺体に刺し、更に大声で笑った。

そして、不意に不快そうな顔になり、木刀を体内に消して、どこ

へともなくつぶやきだす。

「あゝあ！これでようやく夜衣花ちゃんと仲直り出来ると思ったのに、台無しよ」

つぶやきながら、歩き出し、今まで執拗なまでに痛めつけていた遺体に見向きもしない。まるで始めからそこに何もなかったかの様に。

「ピンチの夜衣花ちゃんを私が颯爽と現れて助けて、ありがとうお姉ちゃん。今まで怒っててごめんね。ううんいいのよ夜衣花ちゃん。だって、妹を助けるのは姉として当然でしょ。お姉ちゃん。そして、二人はひしつと抱き合う……そうなるはずだったのに！その為に雇ってやったって言うのに！使えない！」

それまでにここにことつぶやいていた女が、唐突に激昂し、振り返り、遺体に下に戻って、遺体を蹴り出した。

しばらく一心不乱に蹴り付けた後、またしても唐突にそれを止め、天井を見上げて明らかに狂気を宿した笑みを浮かべる。

「そう言えば……そろそろだったわね？あれ」

トンネルの一部がカサカサと動く。

「じゃあ、夜衣花ちゃんにやって貰うように働きかけなくっちゃ。うふふ。待っててね夜衣花ちゃん。今度こそ夜衣花ちゃんのピンチを救ってあげるから」

そう言っただけで女は笑いながらこの場を去り、後に残されたのは証拠隠滅の為に、死体や車に群がり喰らう無数の蜘蛛達のみだった。

第三話『戦巫女と言わざる魔法使い』 1

「「そうか……君は随分損な性格をしているな。……流石は主人公と言った所か……」」

「主人公？」

「「いや、何でもない……願わくば、君に与えた運命を変える選択が、あらゆる宿命の悪意に打ち勝つ事を」」

????

彼は夢を見る。

彼が力を得てから時より見る様になった夢だが、ここ最近はその頻度が増していた。

これは予知夢。

未来に起こる可能性の一つを見せる夢。

周囲の情景はぼやけているが、ここが大きな橋の上だと言う事は分かる。

その橋の上で彼は待っていた。

誰を待っているか、何度も同じ夢を見た彼には分かっていた。

ほどなくして、彼の前に待ち望んでいた人物が現

彼は不意に目を覚ました。

いつもとは違う中途半端な所で目を覚ました為、やや意識が朦朧としている。

「お休みでしたか、申し訳ございませんマイマスター」

その声は男の隣に立つ女性から発せられた。

目が途中で覚めた原因は、彼女が部屋に入ってきたせいだと分かったが、彼は別の意味で眉を顰める。

どこか全体的にとろんとした感じのその女性は、何故かナース服を着ていた。

彼が今居る場所は、彼が隠れ家として使っているビルの一室。クリニツクがビルに入っただけでもないし、彼は医者でもない。意味が分からず、彼は、自分が座る電動車いすに備え付けられているノートパソコンに文字を打ち込む。

すると、ノートパソコンから男性の人工音声が発せられた。

「何でナース服なんて着ている？」

その問いに、彼女は笑顔で、

「黒樹夜衣花様が病人を連れてくるそうですから」と答え、彼は眉を顰めた。

「夜衣花君は勘違いしているのかな？僕は医者じゃなくて、魔法使いなんだかね」

そうつぶやきをノートパソコンに入力し、苦笑混じりのため息を吐いた。

相島

「言わざる魔法使い？」

私の問い返しに夜衣花ちゃんは頷いた。

魔法使いに襲われた翌日、私達は、エレアさんが運転するレンタカーで、とある町に向かっている。

何でも退魔士……正確には夜衣花ちゃんとその仲間のみ協力している魔法使いがいる町だとか。

そして、その魔法使いに私の病気を診て貰う。

それだけを聞かされて車に乗り、車中でその魔法使いの話をしているんだけど……

「言わざるって事は、喋らない魔法使いって事だよ？でも、魔法使って、呪文とか唱えなくちゃいけないんじゃないの？」

その疑問に夜衣花ちゃんは首を横に振った。

「私もそれほど詳しくないですけど、一概にそういうわけでもないらしいんですよ。特に現代の魔法使いは、昔の魔法使いとは別物ですから」

別物ね……………あれ？そう言えば……………

「ねえ？夜衣花ちゃん。昨日、退魔士と魔法使いは基本的に対立関係にあるって言ってた？その魔法使いの人は、大丈夫なの？」

「大丈夫です。今から会う魔法使いは……………公然と味方だとは言えませんが、間違いなく私達の味方ですから」

？……………意味が分からない。

顔にそれが出ていたのか、夜衣花ちゃんは苦笑して、

「色々と複雑なんです。その内にその辺りの説明もしますから、今はとりあえず、彼の事は内緒でお願いします」

「内緒？」

「はい。私達以外の、他の退魔士の前で彼の事を喋らないでください」

……………よく分からないけど、

「分かったわ」

私は頷いた。

第三話 『戦巫女と言わざる魔法使い』 2

夜衣花

魔法使い。

世界の外から流れてくる魔力を使って、物理法則ではありえない法則・現象⇨魔法を起こす者達。

退魔士。

魔法をその身に宿し、その魔法を使って人に害なす魔なる存在を退ける者達。

彼らは太古の昔から時に協力し合い、時に争いながら、共に人の社会の裏で存在し続けた。

だけど、ある時、互いの主義の違いから大規模な戦争になってしまった。

激しく長く続いたその戦争は、退魔士が魔法使いを滅ぼす事で終結。

こうして、魔法使いは、この世界から姿を消した。

「え！？姿を消したって、昨日の魔法使いの人は？」

私が話す魔法使いと退魔士の関係に、みよんネエは驚きの声を上げた。

「一々良いリアクションをしてくれるみよんネエに私は苦笑しつつ、
「さつき言いましたよね。昔の魔法使いと現在の魔法使いは別物だつて。つまり、こういう事なんです。一度滅ぼされた魔法技術が近年、『ある人物』の手によって『科学技術を融合させて復元された』……つて事です」

「だから、ノートパソコンとかを使っているのね……でも、何でコンピュータを使うの？」

「詳しくは知らないですけど、何でも、昔は魔法使いの脳で展開していた魔術式とか言うのを、コンピュータで代用しているとか」

「……………何だか、今の魔法使いの人達って、物語で聞く魔法使いと全然違うのね」

「そうですね？最近の漫画とか小説とかでは、魔法使いがコンピュータを使うのはよくある事ですよ？」

「そうなの？私、そう言うのって、昔から見ないから……………」

「じゃあ、今度家に帰ったら、見せてあげますね。家にはそう言うのが一杯ありますから」

「そう？ありがと」

微妙に困った様な表情のみょんネエ……………考えて見れば、お姉さんぐらいの年頃から漫画とかを見出す人って……………あまりいないかな？……………まあ、

「とりあえず、そんなわけですから、直接関係ないとは言え、現在の魔法使いは退魔士に良い印象を抱いてませんし、退魔士も同じ事にならないか警戒しているってわけです」

相島

夜衣花ちゃんから色々な話を聞きながら、車に乗る事一時間と少し。

私達が乗るレンタカーは目的のビルの前に着いた。

一見すると普通のビルに見える。

「だけど……………ここに魔法使いが、私の病気を治せる魔法使いの人在る……………とてもそうは見えないんだけど……………」

私の不安をよそに、夜衣花ちゃんとエレアさんは、さっさとビルの中に入ったので、私は慌てて二人の後を追った。

私達はエレベーターを使ってビルの三階に上がり、通路の端にある部屋のドアをノックした。

ノックして直ぐに、ドアが開き、中から出てきたのは……………何故かナーズ服を着た女性だった。

「……………また形から入っているんですか？ミーコさん」

夜衣花ちゃんに呆れられながらミーコさんって呼ばれた、どこか

全体的にとろんとした感じの女性は、にっこりと笑って、

「どうぞ。マスターが中でお待ちです」

そう言っただ中に入れてくれた。

中は……昔ドラマとかで見た事がある探偵事務所を……小奇麗にした様な空間が広がっていて、その窓側に電動車椅子に乗った四十代ぐらいの男性がいた。

その男性は、にっこりと笑って、電動車いすに付けられていたノートパソコンを打った。

すると、ノートパソコンから、

「「やあ、夜衣花君。エレア君。元気そうだなによりだよ」」
と声が出た。

「はい、お久しぶりです日向さん。そちらもお変わりないようで笑顔で挨拶し、それに合わせてエレアさんも会釈する。

二人とも男性・日向さんがパソコンに喋らせている事に一切疑問に思っていないようだった。

なんでパソコンに？

その疑問に、日向さんを改めて見て……気付いた。

日向さんの喉にでたらめと思えるほど酷い手術跡がある事に……

……。

驚いた表情が出てしまったのか、日向さんは苦笑した。

「「驚かせてしまったようだね」」

「え？あ！す！すいません」

慌てて謝ると、日向さんは笑顔で、

「僕は幼い頃に酷い事故に遭ってね。昔からこの通りなのさ。だから、多少驚かれたぐらいで、気にはしないさ。だから、君も気にしないでくれ」

「は、はい」

「「……さて、夜衣花君。病人を連れてくるつと聞いたが……彼女の事か？」」

日向さんの問いに、夜衣花ちゃんは頷いて、私の事を紹介してく

れた。

「相島命子さんです。私の見立てでは無意識魔力吸収蓄積病だと」
「無意識魔力吸収蓄積病？それはまた珍しい病気だな……」
私の病名を聞いた日向さんは難しい顔をして、私の方に改めて向き直り、

「僕は日向魁人^{ひゅうが かいと}。既に知っていると思うが、魔法使いをやっている」

そう言って優しい微笑みを浮かべてくれた。

第三話 『戦巫女と言わざる魔法使い』 3

相島

無意識魔力吸収蓄積病の治療には少なくとも数日の時間が必要らしく、私は日向さんに預けられる事になった。

その間、夜衣花ちゃん達は前から決まっていた別の用件を済ますらしいけど……何だか心細くて、不安なんですけど……。

私の不安を余所に、日向さんは、ノートパソコンを言語出力とは違う操作して……その掌に光の塊を出現させ、何も無い壁にその光の塊を投げ込んだ。

光の塊が壁に当たった次の瞬間、壁に光の塊がまるで水面に小石を投げ込んだかの様に消え、唐突にドアが現れる。

驚く私を余所に、ミーコさんが扉を開いて……そのドアの向こうには、草原と大きな屋敷が見えて、私は絶句。

「こちらがマスターの研究所です」

私は恐る恐るドアの向こうを覗き込み、吹き込んでくる自然な風に、思わず茫然とミーコさん・日向さん・エレアさん・夜衣花ちゃんの順に顔を見た。

「隔離結界を二度も経験しているのに、こんな事で驚くわけ？」

と若干小馬鹿にした感じでエレアさんが言うけど……こんな事って……普通は驚く事よね？

「御安心ください相島様。このマスターの研究所は、ちゃんと地球上にありますので」

えっと……何が安心なんだろう？……ん？……地球上？……

……それって、

「まるで地球外にもあるみたいない方ですよね？」

「はい。ありますけど、それが何か？」

平然と答えるミーコさんに、私は再び絶句するしかなかった。

……魔法使って……凄過ぎ……でも、そんな魔法使い達

を夜衣花ちゃん達退魔士が滅ぼした事があるって言うのが……？
チラツと夜衣花ちゃんを見ると、夜衣花ちゃんは何か難しい顔を
していた。

そして、私の視線に気付くと、少し笑って……何だか何かを決
意した様な、そんな笑みだった……日向さんを見た。

「日向さん。相島命子さんの治療の他に、もう一つ依頼してもい
いですか？」

「構わないが、一体どんな依頼だい？」

唐突な依頼と言う言葉に、夜衣花ちゃん以外のこの場の全員が怪
訝な顔になった。

「簡単な事です。病気の治療中に、命子さんに私達側の基礎的な
事を教えて欲しいんです」

「……そんな事なら、君でも出来るんじゃないのか？」

「かじった程度の知識より、日向さんが説明した方が分かりやす
いと思いますけど？」

「さて？どうだろうね？」

「それに、魔法の事はついでです」

「ついで？」

「はい、本当に命子さんに教えて欲しいのは……」

「……ああ、そう言う事が……まったく、君と言う子は……」

……

何かを納得したのか、若干困った様な優しい笑みを夜衣花ちゃん
に向ける日向さん。

私は意味が分からず困惑していると、夜衣花ちゃんが私に向き直
って、

「そう言うわけで、治療中に日向さんから色々な事を教わって
ください。そして、」

そして、私に向けられた夜衣花ちゃんの言葉に、私は困惑した。

「一昨日契約したばかりでなんなのですが……もし、日向さん
の話を聞いて、気が変わったのなら、契約の破棄を日向さんに言っ

てください。あ！もちろん、契約を破棄したからと言って、治療費の請求はしませんから」

そう言って、明らかに作り笑いだと分かる笑顔を私に向けた。

????

レンタカーの中で、夜衣花は助手席に座り、じつと窓の外を見ていた。

エレアはその夜衣花に心配そうに声を掛ける。

「夜衣花お嬢様。……よろしかったのですか？」

「何が？」

夜衣花は窓の外を見たまま、若干不機嫌そうな声で問い返した。

「その……あの女の事………気に入っておられたでしょ？何もこんなに早く……しかも、あの男に話させる事は………」

「……このまま一緒に仕事を続けていけば、いずれは知る事だし、こつち側に深く入り込んでから知るより、出来るだけ早く知っておいた方がいいでしょ？」

「それはそうかもしれませんが………」

「日向さんにお話ししたのは、当事者である私達が話すより、第三者である日向さんが話した方が………みよんネエが、ちゃんと自分の判断で選択出来るはずだから………大体」

そこで窓の外を見るのを止め、からかう様な笑みをエレアに向ける夜衣花。

「みよんネエの事をエレアは嫌ってたんじゃないの？」

「それはそれ。これはこれです。ただ、エレアは夜衣花お嬢様が悲しむ姿を見たくないだけです」

「そう………ありがとうエレア」

第三話 『戦巫女と言わざる魔法使い』 4

相島

草原の中に建つ屋敷の中に案内された私は、広い個室に案内された。

「治療が終わる数日間。相島様にはここで寝泊まりしていただきます」

ミーコさんに案内された部屋は、まるでどこかの高級ホテルの様な造りで、映画とかでしか見た事がないバスルームに、大きな天蓋付きベットなど……つい先日まで野宿をしていたのが嘘みたいな所だった。

……これも魔法で造ったのかな？

そんな事を思いながら、私は部屋に荷物を置き、再びミーコさんの案内で日向さんが居る所に移動。

日向さんがいる部屋は、前に病院で見た事がある……ＣＴスキヤンだっけ？……みたいなのがある部屋だった。

「じゃあ、その台に寝てくれる」

「あ、はい」

私は言われた通り台に台の上に寝転び、

「じゃあ、ベルトで固定しますね」

ミーコさんによって頭・腕・腰・足を台に備え付けられたベルトで固定された。

「これから少し長い検査を行う。だから、その間に君に基礎的な事を教えたいと思うんだが、いいかい？」

「はい。よろしく願います」

色々な検査を受けながら聞いた日向さんの話によると、魔法使い・退魔士達の間では、この世の全ては『根源意志力』と呼ばれる『在ると言う意志』によって構成されているって考えられているらしい。

その根源意志力の集まり具合で、世界になったり、人になったりするとか。

つで、その根源意志力は、世界の外に満ちていて、人などの高密度な根源意志力に魂を持つている存在は、自分の存在を維持する為に常に外から根源意志力を得る必要があつて、その為の穴が魂の中に開いているとか……つで、その穴から根源意志力を得て、魂を構築し、意志を持ち、意識を得て、意志力を生じさせる。そして、余剰となつた根源意志力が魔力になるとか……もつとも、普通の人は魔力になるほどの、なつたとしても僅かな量しかならないほどの穴しか開いていないから、普通の人達は魔法を使えないし、魔法を宿せない。だから、魔法使いや退魔士達の魂の中には、余分な根源意志力を得られる大穴に魔力孔と名付けられるほどの大穴が開いているつて話なんだけど……。

「本当に珍しいタイプだね」

検査を終えた日向さんの第一声がそれだった。

「珍しい？」

「通常、魔法関連の病気にかかる者は、魂の中に魔力孔が開いている。要するに、魔法病は制御出来ない退魔士能力つと言う事なんだが……君の中には魔力孔が開いていない」

「えつと……つまり、どういう事なんですか？」

「もし、仮に普通の魔法病にかかつていたなら、自然治癒していた可能性が高かつたつて事だよ。無意識魔力吸収蓄積病と言う魔法自ら魔力を喰らう魔法病だからこそ、魔力孔がない君の中にも存在し続けていたんだろうさ……後、これはまだ仮説だが、魔力孔がない君だからこそ、今の今まで死なずに済んだのだろう」

「死なずに済んだ？」

なんかとんでもない単語が出てきた。

「過去の文献などによると、君と同じ魔法病に掛つた人間は、発病後、遅くて数年、早くても数週間で、魔石……魔力が物理レベルまで圧縮されたものの事で、君の身体のうちらこちらに宝石みたい

なのがあるだろ？その事だよ……その魔石が身体の重要器官に出来て死に至っているそうだ」「

ノートパソコンで中を見ながら日向さんはそんな事を言った。

「魂と言うのは、人の何処にあると言う訳ではないが、発現しやすい、繋がりがやすい場所は、大体が重要器官だ。だから、内側からも魔力を吸収していた普通の無意識魔力吸収蓄積病では、重要器官に魔石が出来やすかったんだろうが、君には吸収するほどの魔力がない……………君はいくつもの偶然か重なってその病にかかり、いくつもの偶然が重なって今も生きている。僕達側から言わせれば、それは物凄く幸運な事だけれど、これを幸運と考えるべきか、不幸と考えるべきか……………君次第だろうね」「

……………
「さて、治療の準備があるから、今日はここまでにしよう。食事の準備が出来るまで、部屋で休むなり、散歩をするなり自由に過ごしてくれ」「

私は、自分の今までの人生を幸運と思った事はあまりない。

どちらかと言うと、不幸だと思った事の方が多い気がする。

そもそも、私は自分の身体の事が嫌いだったし、今も対して好きではない。

その原因である病気を今治療して貰っているわけだけど……………

日向さんはなんであんな事を言ったんだろう？

そんな疑問を抱きながら、私は屋敷の中をあちらこちらと散歩してみた。

実の所を言うと、いかにも魔法使いつて感じのものを期待してただけ……………見るものほとんどが……………一般人の私からすればとてつもなく豪華なものばかりだけど……………普通の物ばかりだった。その事を食事の時に言うと、日向さんは面白そうに笑う仕草をして、

「魔法使いだからって、常に魔法を使って生活しているわけじ

やない。むしろ、魔法を使わない事がほとんどだと言っている」「
そんな意外な事を言った。

「どうしてですか？魔法を使った方が、色々と便利な気がするんですが？」

「「さっき言った通り、魔法は本来この世界にないものだ。だから、常に存在させると、『世界の拒絶反応』が起き、魔法を消滅させようとすると……要するに、維持する為に魔力を常に使い続ける必要があつてめんどくさいんだよ」」

……………めんどくさいって……………

何だか物凄く困惑する話を聞いて食事は終わり、食後、日向さんから話があると言われ、あてがわれた部屋に戻ろうとした私は引き留められた。

「「さて、今から君には明日の為に幾つか話したい事と聞きたい事がある」」

そう言われて、私は直ぐにピンと来た。

「夜衣花ちゃんのもう一つの依頼ですか？」

「「その通り。そして、君の答え次第で、明日から始める治療方法を決める」」

治療方法を決める？

「「一つは病気の原因となっている魔法を除去する方法。そして、もう一つは、その魔法を退魔士能力として昇華させる方法」」

……………それって……………

「「君は答え次第で、分岐人類になるって事だよ」」

分岐人類？

第三話 『戦巫女と言わざる魔法使い』 5

相島

「分岐人類とは、魔法を自らに宿した者達が、その子供にも宿した魔法を受け継がせる事が出来る者達。要するに退魔士達の事だよ」

「分岐って事は、」

「そう、厳密に言えば、退魔士達は今最も繁栄している人類とは、別物だと言える。実際、遺伝子的にも極僅か違いが見られるが、これは分岐人類だけじゃなく、超能力者にも見られる事だからね……」

「……」
「えつと……超能力者？」

「魔法を宿したが、子供には受け継がせる事が出来ない者。もしくは、分岐人類の始祖の事を僕達は超能力者って呼んでいる」

「超能力も魔法の一種って事ですか？」

「言わなかったかい？この世界の法則以外の事を魔法と呼ぶと」

「……でも、そうなる私には、超能力者になるって事なんじゃないんですか？」

「君の魔法病は、遺伝性だ。少なからず君のご両親のどちら、もしくは先祖に、症状は軽いが同じ症状が出ていたはずだよ……まあ、魔法を宿していると言っても、君のは自身で制御が出来ないだから、今の君は超能力者でも、分岐人類でもないわけだが……もし、退魔士能力として昇華させる治療方法を選んだのなら、君はめでたく分岐人類になる。と言うわけだよ」

「……そっか、だからさっき、私に幸運か不幸か君次第だと言ったんだ。」

「さて……何から話そうか……そうだな。まずは、僕と夜衣花君との『表向きの関係』を話そうか」

「表向きの関係？」

「「そう。僕達は仲良くやっているが、退魔士、魔法使いの世界では、僕達は『殺し合った仲』と言う事になっている」「

「え？」

「「まあ、本当に殺し合ったから、事実と言えば事実なんだが」「
「えええええ！？」」

夜衣花

日向さんとの出会いは、退魔士と魔法使いと言う関係では、ある意味普通な出会い方だったのかもしれない。

私が日向さん退魔の依頼を受け……………殺し合いをした。

後から聞いた話だと、『お互いに罠にはめられていた』らしいけど……………あの時は……………昨日以上に死ぬかと思ったな……………まあ、おかげで本来なら知り合えない人と仲間になれたから……………いいのかな？

そう思って、私は思わず苦笑した。

その苦笑に気付いたエレアが不思議そうな顔をした。

「夜衣花お嬢様。どうかなさいましたか？」

「え？うん。ちょっと日向さんと初めて会った時の事を思い出していたの」

「……………嫌な事を思い出させないで下さいよ」

「そうね。あの時エレアとガルンは、ミーコさんにぼこぼこにされてたもんね」

本当に嫌そうな顔をしているエレアに、私は苦笑した。

相島

「「僕と夜衣花君には敵が多くてね。まあ、僕の場合は、忠告と牽制？……………そんな様なものだったが、夜衣花君の場合は、本気で僕に夜衣花君を殺させる様に依頼を回したんだろうね。まあ、結果的にはお互いの敵の思惑は外れ、今の様に僕と夜衣花君は密かに仲良

くしている。そう言うわけだよ」「

そう人工音声で語る日向さん。

何があつたか分からないけど……よく殺し合つたって仲で、今の様な関係になつてゐるなあ……それも気になるけど、それより気になるのは、

「……その、どうして夜衣花ちゃんがそんな目に？ 依頼を回したと言う事は……その、夜衣花ちゃんの……」

「「そう、僕の退魔の依頼を夜衣花君に回したのは、黒樹家の者だよ」「

言いよんだ私の問いを、日向さんはあつさり答えた。

「「正確には、分家の者達の手によるものだったみたいだがね」「
「分家？」

「「黒樹家の退魔士能力はほぼ百パーセント受け継がれる能力だね。その分、分家が他の退魔士家系に比べて多く。そして、次期当主と言うだけで、他の分家から命を狙われるなんて事はよくある事なんだそうだよ」「

「……えっと、よく分からないんですけど……次期当主とかつて普通は本家の人間がなるもので、分家の人はあまり関係ないんじゃない……」

「「まあ、一概にそう言うわけではないとは思つが……黒樹家の場合は、退魔士と言う家系である事も関係してか、実力で選ばれる事が多く、その為分家の者が本家の養子になつて当主になる事もよくあるそうだ。ちなみに夜衣花君は黒樹家本家直系の子だよ」「

えっと……それってつまり……

「夜衣花ちゃんが黒樹家の中で一番強いって事ですか？」

「「一番強くなる可能性が高い。が正確かもしれない。実際の所、まだ今の夜衣花君より実力が上だと言われる者もいるようだしね。現当主や夜衣花ちゃんのお母もその一人かな？」

「……夜衣花ちゃんのお母さんが黒樹家の者って事なんですよね

……しかも、今の夜衣花ちゃんより実力がある。何で娘の夜衣花ちゃんが次期当主なんですか？実力で当主が選ばれるなら、それが自然に思えるんですけど……」

その私の質問に、日向さんの指が躊躇う様に少し止まった。

「……夜衣花君の母親・黒樹夏子くろき なつこには、次期当主の資格は無い」

資格が無い？

「確かに彼女は夜衣花君の前の次期当主だった。だが、彼女は幾つかの黒樹家の掟を破っている為、親族会議で次期当主の資格を剥奪されている」

「あの……掟ですか？今時の日本で？」

「退魔士の家は閉鎖的な所が多いからね。厳しい掟が未だに残っている家が多いそうだよ。そして、これは、父親の操形夜そうけいよにも言える事でね」

操形？……えっと確か、日本ってまだ夫婦別姓は駄目だったよね？……って事は、

「夜衣花ちゃんのご両親は事実婚なんですか？」

「いや、戸籍上は黒樹家に入っているよ……ただし、それを両家は認めていないがね」

？

「父親の生家である操形家は、黒樹家と同様に日本五大退魔士家系の一つで、彼も操形家の次期当主候補だった……つまり、夜衣花君のご両親は、両家の意向に逆らって一時期『駆け落ち』していたんだよ」

第三話 『戦巫女と言わざる魔法使い』 6

相島

「駆け落ち……………夜衣花ちゃんのご両親が？……………でも、一時的つて事は、直ぐに捕まっただんですよね？」

「その通り、そして、その時には二人の間には子供が出来ていた。それ故に、両家は仕方なく二人の入籍だけは認めたとすうだ」

「……………じゃあ、その時の子が夜衣花ちゃんなんですね」

「「いいや」」

「へ？……………え！じゃあ、夜衣花ちゃんにはお兄さんかお姉さんがいるんですか？」

「ああ、兄がいる」

「お兄さん？……………じゃあ、そのお兄さんも退魔士なんですか？」

「「いいや、違う」」

「？……………えつと……………エレアさんみたいにあぶれたつて事ですか？」

「「いいや……………そもそも、彼には退魔士になる資格もない上に、

退魔士が実在する事も知らない」」

「え？……………えつと？」

「「さつき言った通り、黒樹家の退魔士能力は、他の退魔士能力と違いほぼ百パーセント子供に受け継がれる特徴がある」」

「えつと……………つまり、極稀に退魔士能力を引き継げない子供が産まれるつて事ですか？」

「「その通り。そしてそれは、黒き大樹が魔法生物として確立した珍しい退魔士能力である為に起こる現象でもある」」

「確かに木みたいでしたけど……………」

「「だから、その受け継ぐプロセスも植物の様に、黒き大樹が寄生している保有者の魂から、新たに生じた子供の魂へ、黒き大樹の種が送り込まれる事により受け継がれる。そのプロセス故に、ほぼ百パーセントと言える継承率なんだが……………極稀に、黒き大樹と『相

性が良過ぎる者』が現れる」

「え？相性が良過ぎるといけないんですか？良い分には問題ないんじゃない……」

「「いいや。黒き大樹の場合、相性が良過ぎると一つの問題が起きる。黒き大樹の種は、発芽の際に、栄養である魔力を得る為に、着床した魂の魔力孔を広げる習性がある。これによって寄生された者は黒き大樹に魂を喰らわれずに済むんだが、相性が良過ぎる者の場合は、その魔力孔が『開き過ぎる』という現象が起きてしまう」

「開き過ぎる？」

「「魔力孔が開き過ぎる事により、発芽したばかりの黒き大樹では耐えられない魔力が魂に流れ込み、黒き大樹の種は母体へと流されてしまう。そして、この現象により、黒き大樹を受け継げなかった子供は、『種なし』と呼ばれる『魔力が異常に高いただの人間』になってしまう。というわけだ」

「じゃあ、そのお兄さんは」

「「そう。普通の人間として、黒樹家から離れた場所で育てられ、妹の存在も教えられていない」

「教えられていない！？夜衣花ちゃんの事をですか！？どうして！？」

「「……それは……そもそもその兄が『生きてはいけない存在』だったからだよ」

「……あの……えつと？……意味が分からないんですけど？……生きてはいけないって……」

「「夜衣花君の母親・夏子が、いくつかの掟を破っている。さつき僕はそう言ったよね」

「ええ……ええ？」

「「夏子が破ったもう一つの掟は、種なしを殺さなかった事」

「え！？ええええ？つど、どう言う事ですか！？」

「「……黒樹家は退魔士の中でも群を抜いて魔法に対して強力な力を持っている。天敵と言っても過言じゃないほどにね。だからこ

そ、最も過去の魔法使いに恨まれていた……そんな過去の魔法使い達が、黒き大樹を持たない膨大な魔力を持った者が黒樹家に産まれたと知ったら……どうなったと思う？」「

「どうなったって言われても……どうなったんです？」

「過去に産まれた種なしは、魔法使いに誘拐され、対黒樹家の魔法使いにされた」

「対黒樹家の魔法使い？」

「ああ。そして、黒樹家に甚大な被害を及ぼしたそうさ。だからこそ、同じ事が起きない様に、黒樹家は種なしとして産まれた子供を産まれた直後に殺す掟を作り、夏子はその掟を破った……話によると、産まれてくる子供が種なしだった為、二人は駆け落ちと言う手段を選んだそうさ。子供を黒樹家に殺されない為に」

「……でも、結局黒樹家に捕まってしまったんですね？」

「ああ、だから、夏子と夜は我が子を守る為に、黒樹家と取引をした」

「取引？」

「取引により黒樹家から提示された条件は四つ。一つ、産まれた子に魔力孔封印処理を施し、黒樹家とは無縁の場所で普通の人として育てる事。二つ、夏子・夜の黒樹家本家接近禁止。三つ、黒樹家に回されるA級以上の退魔を優先的に担当する事。そして、最後の四つが、次に産まれてくる子供が女子であった場合、その子供を黒樹家本家に差し出す事」

「差し出す？え？女の子だったらって……じゃあ、今の夜衣花ちゃんは……」

「ああ、両親から引き離され、黒樹家本家で育てられている」

「……あの……どうしてなんです？」

「どうしてとは？」

「どうして女の子だったらって条件が？」

「理由は二つ。一つは、種なしが産まれた後の子供は、その種なしから剥離した黒き大樹の種子を受け継ぎ、本来受け継ぐ種も含

めて、二つの種を受け継ぐ。これにより、その子供はより強力な退魔士になる。そして、もう一つは、黒樹家の当主は女性しかねないからだ」

「女性しかねない？」

「黒樹家本家には、黒樹家初代当主・衣ころもが、自身の黒き大樹に喰われて出来た一本の大樹がある。そして、それを祭る為に当主が巫女を兼任する必要があるそうだ」

「えっと、それって、男性じゃ駄目なんですか？」

「駄目らしい。……何でも衣は大の男嫌いだったらしく、樹となった今でも男が近付くと大暴れするそうだよ。そして、その当時から、今でも、黒樹家に当主となれるほどの実力と素質を持った者は……現当主の眼鏡に適う者は夜衣花君以外いないそうさ。だからこそ、黒樹家現当主・四し姫ひめは、次期当主になる可能性が高い種なしの次の子を、どうしても手に入れたいと考え、取引した。そして、夜衣花君が日本五大退魔士家系の次期当主である限り、退魔士の中の退魔士である限り、退魔士とは無縁な世界で育てられている兄には、夜衣花君と言う妹がいる事を教えるわけにはいかない、黒樹家が許さない。と言うわけだ」

「……じゃあ、夜衣花ちゃんは、ご両親にも……お兄さんにも会えないんですね」

「いいや。両親とは、月に何度か黒樹家本家以外の場所で会ってる」

「そうなんですか！……よかつた……」

「そして、兄とは、今、会いに行っているよ」

「へ？会いに行ってる？今!？」

第三話 『戦巫女と言わざる魔法使い』 7

相島

「兄さんと会ってるんですか？え？だって、さっき、妹だって教え……あ！」

そこまで言って、私は言葉のある可能性に気付いた。教えていないって事は……

「「そう、夜衣花君は、赤の他人として会っている。確か、両親の知人の娘と言う事になってるんだったかな？そして、仕事で忙しい知人の頼みで、長期休みの時のみ預かっている。と言う設定で会いに行っているそうだ」」

日向さんが、まるで私の心を読んだかのタイミングでそうパソコンに言わせた。

「「やっぱり………本当の兄妹なのに………妹だと名乗れず、接せられず………夜衣花ちゃんは今、どんな気持ちなんだろう？会いに行っているって事は、お兄さんの事を好きなんだろうけど………ふと思っただけど、

「「………これって、普通ならお兄さんを逆恨みしてもおかしくない状況ですよ？」」

「「確かに夜衣花君は兄の事を一時期恨んでいたそうだ」」
「「やっぱり………」」

「「だが、初めて会った時、次期当主候補として接する周りとは違い、普通の女の子として、不器用だが優しく扱ってくる兄に接する事で、恨みの心は消えたそうだ。むしろ、今は非常に、普通の兄妹以上に慕ってるようだな」」

「「そうなんですか………そうですよ。じゃなきゃ、休みの日にわざわざ忙しい合間を縫って会いに行きませんよね」」

「「だが、それによって夜衣花君は、『一つの事件』を起こす事になる」」

「え？事件？」

何だが嫌な予感がした。

今まで聞いた話も十分嫌な話だったけど、少なくとも夜衣花ちゃんと契約を切りたくなる様な話じゃなかった。

つまり、ここからが本題……そんな気がして……

「切っ掛けは、黒樹家。正確には四姫の命令で、夜衣花君の兄と同じ学校に分家次期当主達を密かに転校し……端的に言えば、兄をいじめさせた事」

「いじめさせた？え？何ですか？どうしてそんな事を？」

「簡単な事だよ。取引はしたが、四姫は種なしの存在を許すつもりなんて毛頭なかったって事さ」

「でも、殺さない約束になってたんですよ？」

「そう、だから、黒樹家は直接殺せなかった」

そう言われ、私は寒気が走った。つまり、

「間接的に殺そうと……夜衣花ちゃんのお兄さんを、『自殺させようとしていた』んですか！？」

自分で言っておきながら、その言葉に私は愕然とした。

自殺させる為に自分の親族を送り込む。

馬鹿げた話で、とてつもなく恐ろしいけど……今、夜衣花ちゃんが会いに行ってるなら……

「結果として、それはうまくいかなかった。夜衣花君の兄は、一時期引き籠りにはなったようだが、自殺までには至らなかった……

……いや、正確には、自殺させるまで追い詰め様とした直前に、夜衣君にその事がばれてしまい……その策略は夜衣花君によって潰された」

「夜衣花ちゃんに？ご両親じゃなくて」

「そう。文字通りにね」

文字通り？

「慕う兄が自殺寸前まで追い詰められている。それを知った夜衣君は怒り狂い……いじめていた分家次期当主達・親族会議で

集まっていた分家当主達と四姫を、『半殺しにした』って事だよ」「
「っは！半殺し！？」

夜衣花

今頃……………日向さんが話してるんだろ？……………あの事件の事を
……………自分で日向さんに話して貰う様にしておきながら……………後悔
の心がどこにあるのか……………ドキドキする。

もし、あの話を聞いて、拒絶されたら……………

そう思うと……………出会ってほんの数日しか一緒にいないのに、ど
うしてこんな気持ちになるんだろ？不思議でしょうがないけど…
……………人との出会いってそういうものなのかもしれない。どれだけ一
緒に過ごしていようと、別れを辛く感じない相手もいれば、短い時
間なのに別れが辛い相手……………お兄ちゃんみたいな人もいる。

「夜衣花お嬢様。着きましたよ」

思考に没頭していると、いつの間にか目的地に着いていた。

「エレアはいつもの場所にいますので、何かあった場合はいつで
も呼んでください」

「あのね。何かある事なんてあるわけないでしょ？まったく、心
配性なんだから」

心配そうな顔をするエレアに、私は思わず苦笑した。

「ですが、兄妹とは言え、向こうは夜衣花お嬢様の事を妹だと知
らないんですよ……………もし」

「はいはい。気を付けるから、じゃあ、行ってくるね」

「あ！夜衣花お」

まだ何か言いたそうなエレアを無視して、さっと車から出てドア
を閉める。

まったく、そんな事、あのお兄ちゃんに限ってあるわけないでし
よ？本当にエレアは心配性なんだから……………

第三話『戦巫女と言わざる魔法使い』 8

相島

半殺し……………何と云うか、あの夜衣花ちゃんからもっとも結び付かない言葉が出てきた様な……………

「実際の所は、衣が止めなければ、夜衣花君は彼らを殺していた可能性が高い」

「……………殺していったって……………そんな、だって、夜衣花ちゃんの実力は、まだ今の当主に敵わないんですよ」

「それは普通の状態ならの話だよ。さっきも言った通り、夜衣花君の中には二つの黒き大樹の種がある。つまり、ポテンシャルだけを言えば、他の誰よりも強く、暴走すれば誰も止める事が出来ない」

暴走……………

「まあ、あくまで暴走なのだから、もし、あのまま止められなければ、夜衣花君は今頃この世にいなかっただろうね」

この世にいなかった？……………とんでもない話だけ……………

「……………あの、夜衣花ちゃんはその事にしたのに、何で今でも次期当主で……………黒樹家に居続けているんです？普通は、次期当主になる事も、させる事もしないと思うんですけど……………」

「まあ、普通ならそうだろうが……………だが、この事件で、四姫は夜衣花君の自分をも圧倒する潜在能力をますます気に入り、分家達の強い反対の声に全く耳を貸さず、夜衣花君自身の意志さえも無視して次期当主にし続けているそうだ。もちろん、分家達はそれを納得するはずはなく、隙さえあれば、僕の退魔の依頼や、一昨日の退魔などの一歩間違えれば死んでもおかしくない様な退魔を夜衣花君に回している。と言うわけだ」

……………そう言えば、一昨日の、私と夜衣花ちゃんが会った退魔にエレアさんとか、もう一人いるって言う夜衣花ちゃんの仲間はいなか

った。夜衣花ちゃんの話によると二人とも別々の用件で夜衣花ちゃんの下から離れてて、本来なら退魔の依頼を夜衣花ちゃんがこなす予定はなかったらしいんだけど………そっか、分家達の嫌がらせ……いえ、畏だつたんだ。

でも………命を狙われているって言うのに………なんで夜衣花ちゃん、黒樹家に居続けるんだろう？ エレアさんだつて………

「あの、一緒に過ごし始めて数日ですけど、あの夜衣花ちゃんなら、とつと家から出ていく気が………」

その私の問いに、日向さんは苦笑した。

「確かに、そうだろうが………まあ、簡単に言えば、四姫は、夜衣花君を家に縛り付ける為に、自殺させようとした夜衣花君の兄を再び人質に取ってるそうだし」

………何と言うか………よくもまあ、そんな卑劣な事を繰り返せるわね………

ため息しか出ず、座っていた椅子の背によりかかると、ミーコさんがコーヒーを入れてきてくれた。

お礼を言つてコーヒーを飲みつつ、なんとも言えない気分になる。

………あの夜衣花ちゃんが………

「夜衣花君は、非常に極端な性格をしている」

戸惑う私に、日向さんは再び苦笑した。

「一途で、一度心を許した相手なら、心底心を許し、甘え、その人の為にどんな事でもしようとする。反面、その思いが強過ぎて、裏切られれば二度と心を許さず、その者が心を許した相手を傷付けようものなら………暴走する。夜衣花君は、自分のそういう面を自覚しているし、治りようもない事だと思っている。だからこそ、僕にそれを話す事を依頼したんだろう」

確かに自分で話す様な話じゃないし、話難いものだとは思つけど

………

「夜衣花君の事だから、住み込みで君を雇う契約を交わしたんだろ？」

「ええ、そうですね……」

「あの事件は退魔士の間でもかなり有名な話だ。だから、君が退魔の仕事をするなら、いずれ耳に入る事だろう。そして、一緒に住むとなれば、夜衣花君のもう一つの側面も、いずれは目の辺りにする事になる。だから、もし、それらを知った事により、君が夜衣花君の下から離れる事になるなら、もっともお互いにダメージが軽い今の内に、とでも思ったんだろうさ」

夜衣花

いつもこの瞬間はドキドキする。

住宅街に建てられた二階建ての普通の家の玄関前。

この家に、私の兄と両親は住んでいる。

だけど、両親は黒樹家から無理矢理押し付けられているA級以上の退魔の仕事で、よく家を空けていた。

だから、お兄ちゃんは常に一人で留守番していて、今日も留守番している……はず。

私は、そんなお兄ちゃんの所に、長期休みの少しの間だけ会いに行く事を許されている。

……お父さんとお母さんの知人の娘として……

お兄ちゃんは、黒き大樹を受け継ぐ事が出来なかった。

……そんなくだらない理由で、私は両親と兄から引き離され、私自身が退魔士としての黒樹家代表だからという更にくだらない理由で、妹だと名乗れない。……ああ、駄目だ。今からお兄ちゃんに会うって言うのに、怒りに身を焦がすなんて……もったいない。

私は深呼吸して、玄関のチャイムを鳴らした。

少しして、扉の向こうに人の気配が現れるのを感じ、心臓が更に跳ね上がるのを私は感じ、顔が上気して、にやけてしまう。

玄関のチェーンと鍵が外され、ゆっくりと扉が開く。

現れたのは、伸ばした前髪で目を隠した高校生。

少し驚いた様子のお兄ちゃんに、私は最大限の笑みを浮かべた。

「久しぶり、夜衣斗兄ちゃん」

第三話 『戦巫女と言わざる魔法使い』 8 (終わり)

???

玄関先で満面の笑みを浮かべている夜衣花を、エレアは遠くから
双眼鏡で見ている

その表情は実に複雑そうで、喜ばしくも、苦々しくも思っている
様子だった。

エレアは少しため息を吐き、双眼鏡を別の方向に向ける。
電信柱の上。

そこには普通の者には見えない人形がいて、腰を掛けながら夜衣
花が入った家を監視していた。

夜衣花の父方の実家である操形家は、『人形の王』と呼ばれる退
魔士能力を持つ。

それは、己の魂の一部を人形に入れ、人形を意のままに操ったり、
自分のもう一つの身体として扱う事が出来る退魔士能力。

そして、家を監視している人形は、操形家が主に隠密用を使用す
る特殊な人形。

操形家が黒樹家に依頼されて、黒樹夜衣斗を監視しており、エレ
アはここに夜衣花共に訪れる度に隠密人形を目撃している。

実は、夜衣花が暴走する前は、黒樹家の分家が監視を担当してい
た。

だが、今は夜衣花を恐れて誰もそれを担当したがらず、仕方なく
五大退魔士家系の中で最も繋がりが強い操形家（操形家は退魔士道
具を作っている家でもあるので、その材料に黒樹家の黒き大樹が多
く使われている為、五大退魔士家系の中で最も両家は繋がりが強い）
に監視を頼み、現在の様な状況になっている。

もともと、夜衣斗の監視を頼まれた操形家の者達は、夜衣斗の事
を黒樹家ほど警戒しておらず、むしろ心情的には夜衣花に味方して
おり、真剣に監視はしていない。

その証拠に、隠密人形はエレアが見ている前で大あくびをしていた。

隠密人形の大あくびを目撃したエレアは、思わず苦笑したが、だからと言って、エレアが気を抜くわけにはいかなかった。

夜衣花が夜衣斗に会っている時は、夜衣花が最もリラックスしている時であり、油断している時。

だからこそ、エレアはその油断を突かれない様に、夜衣花が夜衣斗に会っている時は、常に家の近くで警護していた。

もつとも、退魔士達の間でも夜衣斗の存在を知っている者は少なく、例えば知っていたとしても、わざわざ黒樹家の禁忌に関わろうとする者はまずいないので、夜衣斗がいる場所を知っている『夜衣花・両親の敵』は少ない。また、ここに来るまでも細心の注意を払って追跡者がいないかを確認している上に、夜衣斗自身や家自体に魔力を封印・消す結果などが使われているので、魔法による追跡・接近もほぼ不可能に近い。

つまり、エレアのはただの心配性。

過剰なほど警戒しているエレアは、何となしに双眼鏡を家へと向ける。

そして、夜衣斗の隣に腰を下ろす夜衣花を目撃し、

「ああ！夜衣花お嬢様！近いです！近い！」

と思わず絶叫。

その絶叫が聞こえたのか、操形家の人形は呆れた視線をエレアに送っていた。

相島

「「それでどうする？」」

話を聞き終えた後、少しして日向さんはそう問い掛けてきた。

「「……………」」

「「まあ、いきなりこんな話を聞かされて、直ぐに答えを出せと言うのも酷か。返事は明日の朝、治療前に」」

「いえ」

私は日向さんの言葉を、決意を持って遮り、日向さんは少し驚いた表情になった。

夜衣花ちゃんは、自分が拒絶される様な過去を持っているって知っていたながら、私を仲間に誘った……………それってつまり、夜衣花ちゃんは寂しいんだと思う。周囲には信頼おける人達があまりいない上に、そのほとんどが自分を裏切った人達。両親も兄も側にいない。そんな中を、きつと夜衣花ちゃんは、気丈に過ごしている。だから信頼出来る人が欲しくて……………きつと私を試した。もう裏切られたくなくて……………

でも、どこか私を信頼していたんだと思う。じゃなきゃ、こういう依頼を日向さんにしない。

……………知りあってまだ数日だって言うのにな……………だからこそ、だからこそ私はその信頼に応えたい。

応えなくちゃいけない。

そんな気がしたから、

「日向さん。私を退魔士にしてください」

と自然に口にしていった。

「……………いいのか？そんなに簡単に決めてしまって、君の今後に大きく関わる事なんだぞ？」

そう日向さんに問われると、迷う心が生まれたいわけではないんだけど……………

「……………正直に言って、迷わない、後悔しないって言ったら嘘になります……………きつと、今だって迷う心はどこかにありますし、今後もしかしたら今日の決断を後悔する日が来るかもしれません。でも私、決めているんです……………迷ったら、自分の心の思うがままに決めるって」

私がそう決意を込めて言うと、日向さんは考える様な仕草をした後、

「……………そうか……………君は随分損な性格をしているな……………流石は主

人公と言った所か……」

「主人公？」

「いや、何でもない……願わくば、君に与えた運命を変える選択が、あらゆる宿命の悪意に打ち勝つ事を」

「？……えつと？ありがとございます？」

いまいちよく分からない事を言われ、何故か私はお礼を言ってしまった。

夜衣花

夜衣斗お兄ちゃんの家泊った日の夜。

私はお父さんとお母さんの部屋で寝ようとしていた。

本当はお兄ちゃんと一緒に寝たいんだけど、私が他人の子供（と思わされている）せいか、一緒に寝てくれない……恥ずかしくて、私が出せないのもいけないんだらうけど……

私がそれを思って思わずため息を吐いた時、携帯電話にメールが着た。

しかも、普段使っている方じゃなくて、退魔士仕様のどんな場所にいても繋がる携帯電話の方に。

今日を含めて、明日・明後日は退魔士の仕事がないはずだったから、私は思わず眉を顰めた。

……まあ、どうせ分家達のいつもの嫌がらせだらうけど……そう思いつつメールを見ると、そこには、緊急の依頼が入っていた。

しかも、S級の退魔『でいだらぼっち再封印』だった。

第四話 『寡黙な召喚執事と鯉の会』 1

「……減るもんじゃない……」

「減るんです！」

「……何が？」

「心ががです！乙女ががです！」

「……………」

「んー！！！！」

夜衣花

退魔の依頼にはそのほとんどにクラス付けがされている。

それを決めているのが、現地にいる情報を主な生業とする特殊な退魔士達が決めているから、詳細な基準は知らないけれど、下からF・D・C・B・A・Sとなっていて、上に行けばいくほどより強くて厄介な退魔対象となっている。

数日前に戦ってみよんネエを巻き込んだあの魔物のクラスはA級の嫌がらせてエレアやガルンが所用で出掛けている私の所に来たんだろっけど……………ん……………まあ、みよんネエと言うイレギュラーがなければ簡単に終わってたと言えば、終わってた退魔だったけど……………あれは上手い具合に増える前に叩けたから、実際の所はB級だったかな？多分だけど、増え切った事を想定してのクラスだったと思うし……………

っで、今回、私が急遽受ける事になった依頼は、S級。

その多くが『国単位以上の被害・影響が出る魔物が対象になるクラス』で、退魔の対象である魔物の名前は『でいだらぼっち』

ダイダラボッチとか、だいらんぼうとか、地方によっては色々な名前で呼ばれている巨人の妖怪。と言えば、知っている人は知っているかもしれない。

実の所言えば、その多くが、それぞれ名前ごとに全く別の魔物だったりするんだけど、共通した似た被害を出すから、巨人で同じ被害を出す魔物をその妖怪の名前で呼んでて……そのどれもがS級退魔対象になったりする。

妖怪の方の話を知っている人なら知っているとと思うけど、ダイダラボッチなどと呼ばれる妖怪は、山を作ったり、移動させたり、池を作ったりする話が多い。

要するにそれだけ巨大で、場合によっては『事象干渉能力』があるって事。

そんな魔物を放っておけば、あつと言う間に国は滅茶苦茶になっちゃう。

でも、それだけ巨大だから、簡単に倒す事が出来なくて、多くの場合が退魔士側に多大な被害を出していた。

そんな多大な被害を出したでいざらぼちの一体が、富士の樹海に封印されてて、毎年封印が弱まるこの時期に黒樹家かその分家が再封印を施してる。

これはそのでいざらぼちに施した封印が、黒き大樹の『接ぎ木法』と呼ばれる封印方法されている為。

接ぎ木法は、封印対象の周りの木々にその名の通り黒き大樹を接ぎ木して、その場に封印対象を縛り付ける方法で、これを行う事で封印対象から魔力を奪いつつ……時間は掛るけど……消滅させる事が出来る。……もつとも、これには、定期的に接ぎ木に使った黒き大樹の枝を交換しないといけない欠点がある。元々黒き大樹は魔力が満ちた黒樹家の人間の心の中で安定して存在できる一種の魔物だから、接ぎ木によりある程度安定させているとはいえ、どうしても劣化しちゃう。だから、黒樹家とその分家が持ち回りで再封印・新たな接ぎ木を追加しなくちゃいけないんだけど……実は、今回の担当は分家の、しかも、六分家と呼ばれる数多くある分家の中で最も力を持った六分家の一つ『赤樹家^{あかき}』が担当するはずだったんだけど……

「誠に申し訳ございません黒き大樹の戦巫女」

そう言って頭を下げる赤樹家に仕える武装メイド。

武装メイドと言っても、こっちはエレアと違って黒樹家分家出身の武装メイドで、メイドの格好もしていない。

「……まあ、武装メイドって言っても、本当にメイドの格好をしている人は結構少ないって話なんだよね……まあ、慣れたからいいけど……」

エレアを見てため息を吐き、エレアを困惑させながら、

「一体どういう訳でこっちに回ってきたんです？赤樹家次期当主・^ヘ琶夷袖はどうしたんです」

そう聞くと、赤樹家の武装メイドは困った顔をして、

「それが……行方知れずです……」

「はあ？行方知れずって……」

あの女……何度こっちに迷惑を掛ければ気が済むんだ！……まあ、半殺しにした相手だから、恨んでるのは間違いないんだろうけど……そう言えば、この間の退魔も赤樹家から回ってきたわけ……最近多いな赤樹家中心の嫌がらせ……とりあえず言う事だけは言っとくべきかな？

「百歩譲って赤樹家が再封印を出来ない事は認めますが……どうしてそれが私に回ってくるんです。他の六大分家は？」

「申し訳ございません。他の分家方々も別の退魔などでこちらに回せる余力が無いそうなので……」

「……この間の退魔の時も同じ事を言うのね……と言うか、
「いくら再封印するだけの簡単なS級退魔だからと言って……優先順位がおかしいでしょ？いくらなんでも」

「申し訳ございません」

「……この人に文句を言ってもしょうがないか……申し訳ございませんしか言わないし……」

私はため息を吐き、背後の樹海を見た。

正確には、認識障害の人払いの結界が張られている樹海を見た。

封印が弱まっているせいか、若干歪んで見える。

「……………まあ、あまり時間もないみたいですし……………ちゃんと再封印しますから、あなたは帰っていいですよ」

「はい。ご無事をお祈りいたしております黒き大樹の戦巫女」

赤樹家の武装メイドは私に一礼して、さっさと帰って行った。

……………まあ、武装メイドと言っても、私の武装メイドじゃないしね……………

つで、その私の武装メイドは、遅れているみよんネエに連絡を取っていて、

「だーかーらー黒色の肌に、銀色の髪の毛のオールバック、赤い瞳の執事服の男だつて言ってるでしょうが！」

……………どうも所用で離れていたもう一人の仲間ガルンと中々合流できないみたい。

みよんネエが私の過去を聞いても仲間のままでいてくれた事はうれしいけど……………ガルンの奴、一体何をしてるのかしら？

第四話 『寡黙な召喚執事と鯉の会』 2

?????

高速道路のサービスエリア。

ゴールデンウィークを利用して旅行などに出かけている人達の車で埋め尽くされた駐車場の中に、一台の大型トラックが止められていた。

一見なんの変哲もないトラックに見えるが、魔力を探知できる者が見れば、様々な魔法具が組み込まれた特別仕様のトラックだと言う事が分かる。

そのトラックの運転席には、黒色の肌に、銀色の髪、赤い瞳の執事服の男が乗っており、目をつぶって静かな寝息を立てていた。

この男・ガルンⅡバーガは、夜衣花の最後の仲間であり、今まで夜衣花の『もう一つの退魔士能力』に必要な退魔士道具の改造・調整の為に別行動を取っていた。

本来の予定なら、今日はのんびりと黒樹家本家へと帰るはずだったが、昨日の夜に夜衣花に緊急のS級退魔が入った為、急遽ガルンは完成したばかりの退魔士道具をトラックに乗せ、徹夜でここまで走ってきたとわけだ。もつとも、受けた依頼内容はあくまで再封印なので、余程の事が無い限り、トラックの退魔士道具は必要ない。あくまで念の為と言う話だった。

そして、今は新しく仲間に入ったと言う相島命子と合流する為にここで待っているのだが……………

唐突に耳をつんざく派手な音が聞こえ始めた。

最初は特に気にしていなかったガルンだが、その音の発生源が隣に停車した事で流石に寝ていられなくなり、目を開けて隣を見る。

派手なオープンカーが三台止まっていて、いかにも頭の悪そうで時代錯誤な感じの男達がヘッドバンギングしながら乗っていた。

他のパーキングエリア利用客は、恐怖に近い困惑の表情を浮かべ、

オープンカーの近くから次々と離れていく。

そんな中、ガルンは無表情で運転席から降り、隣に止まったオープンカーの隣まで移動した。

接近してくるガルンにオープンカーの一人が気付き、うるんげな視線を向けてくる。

ガルンは無言でくいつと顎を振り、その意味を理解したガルンに気付いた男は、隣の男の肩を叩き、何事かをその男の耳元で叫び、

「やっっちゃう?」

「やっっちゃおうぜ」

などと言い合い下品な笑みを浮かべた。

彼らは知らない。

目の前にいる男が、

命子

夜衣花ちゃんの最後の仲間ガルンⅡバーガさんと合流する為、私は高速道路のサービスエリアに来ていた。

なんでもそのガルンさんは、夜衣花ちゃんのもう一つの退魔士能力を使う為の道具を改造・調整しに行つてたらしいんだけど……このトラックだよ……

夜衣花ちゃんの退魔士道具を運んでいるつて言うトラックは見付けたんだけど……運転席には誰もいなかった。聞いていた外見とバックナンバーは同じだから間違いはないはず……んどこに行つたんだろう?

レストランで食事でもしているのかな?

そう思って、私は教えられたガルンさんの携帯電話に電話を掛けたんだけど、いくら掛けても繋がらない。

仕方がないから、直接本人を探そうとして、ある事に気付いた。

私、ガルンさんの顔を知らないや……

その事にちょっとどうしようか悩んでいる時に、タイミング良くエレアさんから電話が掛けて来た。

ガルンさんがトラックにいない事を教えると、エレアさんの機嫌があきらかに悪くなる。

……………どうもエレアさんはガルンさんの事が嫌いらしい……………それでも、若干怒りながらガルンさんの特徴を覚えてくれたので、ガルンさんを探しにパーキングエリアの施設に入ろうとして、妙な感じがするのに気付いた。

……………もしかして……………これが魔力？

今まで感じた事がない感覚にちよつと戸惑いつつ、感覚を日向さんに言われた通りに研ぎ澄ませる。

私の身体は、日向さんによって疑似魔法使いして貰ったらしく、こついつ今までにない感覚に戸惑うばかりで……………こつちかな？……………

何となく魔力を感じる方向へと歩いて行くと、妙に人がいない場所に……………何故か人が避けて歩く場所を見付けた。

人払いの結界だっけ？何でこんな所で……………何だか物凄く嫌な予感がする……………でも、人払いの結界が張られているって事は……………もしかしたらガルンさんの身に何かが起きているのかもしれない。

そう思った私は、後ろにチラツと視線を向けてから、人が避けている場所へ一歩足を踏み入れた。

その瞬間、私は物凄くこの場から去りたい気分になり、すぐさま反転したくなつたけど……………我慢！……………根性お！

人払いの結界の中で、認識障害とか意識変換とかはそれを認識出来ていれば、根性でどうにかなるものらしい。

実際に、二歩目を何とか踏み出した時、不意に去りたい気分が無くなつた。

どうやら結界を抜けたみたいだけど……………結界を抜けた途端に何だか鈍い音が……………

音の正体を咄嗟に思い付かなかった私は、何も考えずに音の発生源へと顔を向けてしまった。

そして、直ぐに後悔。

だって、聞いていたガルンさんの特徴にぴったりの人が、こつちに背を向けて……………誰かに馬乗りになっていたから……………これはどう考えても……………

顔が思いつきり引きつると同時に、ガルンさんらしき人が拳を振り上げ、

「や、ひやめてく」

馬乗りにされている人が制止の言葉を言い切るより早く、ガルンさんらしき人は拳を振り下ろし、鈍い音が聞こえ、私は思わずびくっと身体を震わしてしまった。

あまりの事に視線をその二人に固定出来ず、周りに向けると、周りには呻き声を上げながら倒れている男性が無数に……………って！

「何をしているんですか!?!」

我に返った私が大声を出すと、もう一撃放とうとしていたガルンさんらしき人がその拳を止め、ゆっくりとこつちへ振り返り、ぞくつとする様な赤い目を私に向けた。

第四話 『寡黙な召喚執事と鯉の会』 3

夜衣花

「今更の話なんですが……大丈夫なんでしょうか？」

樹海の道無き道を歩いて、でいだらぼっちの封印場所に向かって
いる最中、不意にエレアがそんな事を言った。

「何？心配なの？」

「べ！別に心配なんかしていません」

……ツンデレみたいな事を言う……

「ツンデレでもありませんから！」

私の考えを読んだのか、そんな口にもしていない否定をするエレ
ア。

「つで、何が大丈夫なんでしょうか？なの？」

「ガルンですよガルン……あいつと命子と二人つきりにさせて」

あ……

「まあ、流石のガルンも『今の状態』なら大人しくしてるでしょ」

「どうでしょう？逆にエレアは今の状態の方が心配なんです。場
合によっては、命子が襲われる可能性だってあるんじゃないですか
？」

襲うって……

「っそ……そんな非常識な事を、流石にしないんじゃない？」

若干顔が引き攣りつつ否定すると、エレアは分かかってませんねっ
て感じに首を振って溜め息を吐いた。

「あいつに『こっちの常識』を守ろうって気はほとんどありません
んよ？じゃなきゃ、絡んできた不良とかを瀕死になんかしませんっ
て」

「……まあ……そうね」

ガルンは基本、無口で無愛想で無害な奴なんだけど……どうも
過剰な正義感の様な物を持っているらしく、あからさまに悪な奴を

見かけると……大暴れして、相手を半殺しにした事が何度も……
……まあ、相手のほとんどが暴力が日常茶飯事の連中だから、その事はどうでもいいんだけど……

「……でも、いくらなんでも、『それ』と『あれ』とは別でしょ？一緒に考えるのはどうかと思うけど？」

「それはそうかもしれませんが……」

「第一、知り合ったばかりの人と」

「するのがガルンですよ」

私の言葉を遮って私の考えを否定するエレア。

………何だか………エレアが余計な事を言うから心配になってきちゃった………みよんネエ………何事もなければいいけど………

命子

拳にべつとりと付いた血を呻き声を上げながら倒れている男性の服で拭き、ゆつくりと立ち上がった。

ちよつと………いえ、かなり怖いけど………

「ガルンさんですよね？」

私の問いに頷いたガルンさんは、特に何も言わず、倒れている人達を歯牙にも掛けずに歩き出しちゃって、

「え！え？あの………この人達は？」

呻き声を上げて倒れている人達を指差してみるけど、ガルンさんは特に何も言わないで駐車場の方に行ってしまう。

倒れている人達を介抱し様か迷っていると、何だかまた妙な感じがした。

………なんか、動いているみたいないな………そんな感じ………つて事は、もしかして！今張られている人払いの結界って、ガルンさんを中心に張られてる！？このままじゃ！阿鼻叫喚のこの場所に、私がいるのを目撃されちゃう！見た感じ、どう見ても倒れている人達はまともな人達じゃなさそうな格好だし………ん………よし！ほつとこ。うん。そうしよう。

そう結論付けた私は慌ててガルンさんの後を追うと、ガルンさんはトラックの隣に停めてあったオープンカーの前で足を止めた。

私が疑問を口にするより早く、ガルンさんはそのオープンカーに手を掛けて……………一気に持ち上げた!?

そしてそのまま……………口をありえないくらい大きく開けて……………トーストみたいにオープンカーを食べ始める!?

あまりの光景に私は啞然とするしかなくて……………そりゃ、『人間じゃない』って夜衣花ちゃんから聞いてはいたけど……………って、

「人のを勝手に食べちゃだめです!」
と思わずなんか違う注意をってしまった。

????

でいだらぼっちが封印されている樹海の奥。

その場所に、一人の女性がいた。

右目を前髪で隠し、蜘蛛の糸を模した模様が入った着物を着ているその女性は、目の前にある一本の大樹を見上げ、溜め息を吐く。

周囲の樹とは明らかに違う全てが黒いその大樹は、風も無いのに不気味に揺れている。

この樹にでいだらぼちは封印されているのだが、所々枯れている所があり、封印の限界が迫っている事をありありと示していた。

その為か、ある種のプレッシャーの様な物を女は感じ、女は正直帰りたかったが、ここまで来て何もせずには帰るわけにはいかない。

「行きなさい土蜘蛛」

女の命令に、周囲の木々によって出来ていた影の中に無数の赤い光点が生じ、カサカサと影の中から大量の蜘蛛が現れる。

まるで蜘蛛の絨毯の様に現れた蜘蛛達は、女を避けてでいだらぼっちが封印されている大樹に向かい、群がった。

そして、木々を食べ出す蜘蛛達の姿を確認した女は、袖から一枚の札を取り出し、地面に落とす。

札が地面に落ちると同時に、女をあっさり飲み込める程の穴が生

じ、女はその穴の中に落ち、消えた。

札によって出来た穴が消え、ほどなくして、バツキンと何かが割れる音が生じる。

何度も何度もその音は生じ、その度に蜘蛛が群がった大樹が揺れ、終にはまるで爆発でもしたかのように吹き飛んだ。

木片と共に吹き飛ぶ蜘蛛達が次々と霧散していく中、その爆発の中心・大樹があつた場所に、巨大な白い球体が現れる。

が、全ての蜘蛛が消え、爆風が収まっても、その球体には何の變化も起きない。

……だが、

「今のは一体なんです!？」

「分からないわ……でも、この異常な魔力はどうか考えても!」

二人の女性の声が聞こえた瞬間、球体は波打ち、唐突に手、足が球体から生え、胴体となつた球体が人の胴体へと変化し、頭が生えた。

そこに現れたのは、白い巨大な巨人だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6762g/>

黒き大樹の戦巫女(旧)

2011年5月2日17時05分発行